
それなりに上手くいっていた人生でした。

怠けMONO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それなりに上手くいっていた人生でした。

【Nコード】

N1159Y

【作者名】

怠けMONO

【あらすじ】

目を覚ますと、そこには男の娘がいました。

それなりに満足していた人生をやり直すことになった主人公が、新しい人生を楽しく過ごそうと頑張ります。

無論、平和な人生など送らせません！

* 原作を知らずに、衝動的に書き始めた駄文です。

第一話（前書き）

どうも初めまして、駄文ですがよろしく願います。

第一話

それなりに上手くいっていた人生でした。

わりと勉強ができ、平均より高い運動能力をもち、多くの友達ができ、楽しい人生でした。

大学に進学し、やっと明日から20歳になると感傷に浸りながら眠りについたはずでした。

・・・ここはどこですか？

目を覚ますと、体は動かない、頭は熱くて痛い、声は出ない、ないない尽くでした。

それでもあまりの辛さにジタバタしていると、扉の開く音と誰かの足音が聞こえました。

音のした方を霞んだ視界に収めると、そこには長い黒髪の美人らしき人が見えました。

あなたは？と声を発しようにも声が出ず、近寄ってきた人に抱きかえられると疑問に思ったことがあります。

抱きかかえられる？

20にもなる大人が？

そんな疑問を余所に、その女性は私を抱きかかえるなり車に乗せ、近くの病院へと直行し、私は流されるまま待合室に座り、お医者様に見てもらい、薬をもらって再び家に帰って、寝かせられました。

その間、女性は私に向かって「大丈夫？」「どこが悪いと言える？」など心配そうに尋ねてきましたが、私の熟練のその場に合わせて流す技術により問題ありませんでした。

その後、お粥を食べさせてもらい、薬を飲んで寝てしまいました。

次の日、カーテンの隙間から日差しが差し込み、スズメが鳴いており、まさに絵に描いたようないい天気だなあと思いながら目を覚ましました。

薬が効いたようで随分楽になり、周りのことをきちんと認識できるようになりました。

私はふと目についた鏡を這いつくばって取って見ると、そこには白髪が肩ぐらいにまで伸びた目の赤い男の娘が映っていました。

・・・誰やねん

いやあ、どうやら私はまだ夢の中ようです。

ええ、あんな男の娘なんているはずがない。まして自分は自他ともに認める三枚目でしたので、そんなはずがあつてたまるものか！

こついう時はお約束通り、寝れば夢から覚めるのです！

ほっぺは抓りませんよ。現実逃避ではないのです！

これは戦略的撤退なのです！
↑？

しかし、あんなのが実際にいたらホルモンバランスが相当崩壊しているんでしょうね、あはははは。

と再びベッドに入り、目を覚まそうとした時、部屋の外から足音が近づいてきました。その誰かは部屋の扉を開けるなり、

「あかね緋音大丈夫？」

「あかね緋音生きてるか？」

とこちらに尋ねてきました。

ええい！邪魔するでないわあー！

私は大人へと変身する（20歳になる）ために起きるんじゃない！

心の中でシャウトしながら、もう一度寝ようと試みました。

「起きられるようになったか？」

「よかった、昨日急に熱を出したから心配したのよ？せつかくの3歳の誕生日だったのに、残念ね。」

へえー、そうなんですか。それじゃ、って乱暴に撫でないで下さいよ！痛いじゃないですか！

そんな態度が顔にでていたのか男の方は苦笑しながら手を引込め、女性と一緒に部屋を出ていこうとします。

「じゃあ、後でお粥とお薬持ってくるわね。」

はいはいわかりましたよ、お母様。

そして、二人が部屋から出ていき、扉が閉まると私は天井を仰ぎ、理解してしまったために自然とため息を吐いてしまいました。

現実か・・・orz

第一話（後書き）

ありがとうございました。

第二話（前書き）

少し修正しました。

第二話

どうも！白峰緋音でッス！

いやあゝあれからは大変でしたよ。

（認めたくない）現状理解から始まり、この体に残っていた記憶を思い出しながら、新しい幼児生活を何とか過ごしています。

アルビノというハンデを抱えていましたが、そこは元大人の精神のため、外にでて同い年のちびっ子たちと遊びたいと言うこともなく、物静かに日陰で読書を嗜んでいました。

外に出るときは、サングラス（基本的に室内でもつけている）をかけ、日傘を差し、肌を出さないようにしたりするのは大変でしたが、特に問題はありませんでした。

服を買いに出た時に、両親が見た目女の子の私に「似合うから！」と悪ふざけで買ってきたロリータ系の服を強制着用させ、あまりのはまりっぷりに記念撮影会をされたり……………

日本なのに和を感じない西洋の街と非常識さに内心で愚痴を吐いたり……………

休日に両親に連れられて外出した時に、お父さんの知り合いに会い。

その知り合いの連れていた息子に「男女」や「白くて変な奴」とか

らかわれてちよっかいを出されると、両親がキレた上にその子の親まで怒り出し、怒りすぎじゃないかと思った私がその子を弁護する羽目になったりー（その子とは親友になりました）……………

親友と一緒に遊んでいて、私の体質とかを話したら「俺がお前を守る！」と言われたので、「男（大人）が男（子供）に守られるのもなあ」と呟いたらとてもビックリされたり……………

問題はありませんでした！

それにしても、不思議の塊みたいな私が言うのもなんですが、日本ってこんなに不思議なところでしたっけ？

ドでかい西洋を思わせる街のあっちこっちを見れば髪の色がレッド、ピンク、ブルー、ブラウン、ゴールドなどの色彩豊かな人々が歩いています。

さらには、目立つ恰好の私（散策中）に絡んできた不良をあつという間に鎮圧するダンディーー（ですめがね？とか恐れられていました）に出会ったり、迷って辿り着いた女子中に近いコンビ二で、古い制服を着た生気の薄そうな女の子を見かけたり、ギネスをはるかに超えるであろうでっかい木（ばんとうとかいうらしいです）に図書館島とかあったりと前世一（？）とのあまりの違いに自分が変なのかと悩んだりもしました。

そこで色々と気心の知れた心友一（レベルアップ！）に話してみると、顔が笑っているのですが、微妙に汗をかいた表情で、

「だ、大丈夫だよ！」

と何が大丈夫なのか全く分かりませんでした。その必死さに免じて今回は見逃してあげましょう。

・・・そのため息は何ですか？

第二話（後書き）

ありがとうございました。

第三話（前書き）

少し加筆修正しました。

第三話

私も今日から小学生！

そして、今日は入学式！

両親がカメラの準備に勤しみ、楽しみにしていましたが、私は（この世界での）今までの経験からして面倒なことになりそうだなと考えていました。

小学生をやり直すこと自体は懐かしくてちょっと楽しみにしているんですが、子供は純粹で残酷ですからね．．．．．

晴れ晴れしい日なのにこれ以上は暗いことを考えるのはやめようと、出入口近くで式場となるでっかい講堂内を見渡します。

小っちゃい子が溢れかえり、ふざけて遊び、泣き喚き、先生方が大きな声でなんとかまとめようとしていますですがなかなか思うようにいってません。

うん、カオスですね！

この中に混じっていかなきゃと思うと、ため息がでそうですが我慢我慢。
我慢。

さっさと自分の席を見つけて座りましょう。

すると隣からため息が聞こえてきました。

おやおや、そんな人生に疲れたおっさんがするようなため息をするのはどこの誰ぞ、と興味を持ってそちらを見ます。そこには……

人生に疲れた雰囲気的美少女がおりました。

すごいですね、傍から見ていてすぐわかるくらい疲れていますよこの少女。

眼鏡をかけており、長い赤髪を後ろで括り、これから私が入学する麻帆良小学校の新生に配られた花飾りを胸に着けた少女は、どんなよりって表現が相応しいくらい沈んでいました。

そのまま観察していると、その少女がこちらの視線に気づきました。

「何だよ、人のことじろじろ見て？」

おおっと、なんかピリピリしてますよこの少女。

とりあえず、あたりさわりのない挨拶でもしましょう。

初めまして、こんにちは。

いや、妙に疲れたため息をつくのは誰だと思って見たら、あなた（美少女）の雰囲気が出ていたの・・・

「誰が美少女だ！　って、そんなことより、わ、私って変なのか？」

あれ？　なんか怒った上に、ビクビクしだしましたよ？

これは不味い！

何が不味いって私は体は男の娘ですが、精神は元大人！　↑重要

そう、つまり私は紳士（笑）！　紳士（笑）であるべきなのです！

女の子を悲しませてはいけないのです！

いやいや、何をおっしゃいますかウサギさん。

あなたのようなかわいい子（美少女）は中々いませんよ？（あれ？

そういやこの土地美人多くね？）

あなたが変わら、こんな格好の私なんてそれ以上に変です！

もっと自分に自信を持ってください、ね？（サングラスを外して、スマイル〜）

「あ、ああ。ありがとう・・・／＼／」

ふう、どうやらごまかせたようですね。 サングラスが怖かったんですかね？

なんか顔がちょっと赤くなっちゃいましたけど、周りの男子も何人か赤くなってますけど、無問題！

「（こいつならもしかして・・・）な、なあ、よかったら式の後で話さないか？」

もちろんですとも！ 私でよければ何でも聞きますよ。

あ、でも私の友達も一緒にいいですか？ 今ここにいませんけど、後で合流するんです。

「ん・・・、まあ、いいよ。」

よし、ちょっと不安そうですが大丈夫でしょう。

さて、6〜7割ほど子供が座ってそろそろ式も始まりそうですし、静かにきちんと座っていきましょうか。

早く終わらないかな。

さすがに、ぬらりひょん（↑学園長の挨拶時に登場）が実在したのには驚きを隠せませんでした。

後、今日から幼女に懐かれました。

第三話（後書き）

ありがとうございました。

第四話（前書き）

加筆修正しました。

第四話

どうも、美少女と出会った緋音です。

例の少女（長谷川千雨ちゃんという名前らしいです）がお友達になつてから、一年が経ちました。

あの式の後には、私が男だとわかると突然キレだしたことを除けば、順調に仲良くなれました。

我が心友しよーくんとも問題なく仲良くなれましたが、どうも他の子達とは話が合わず、私たちは三人組で行動することが多かったです。

（他の世界からきた）私の常識が間違っているのかと思えば、（この世界で生まれた）千雨ちゃんが私と同じような常識を持っていたんですよね。

そのせいで今まで周りとは何度も衝突しており、家族も分かってくれなかったそうです。

千雨ちゃんは話の通じる相手が見つかって嬉しそうでした。

うんうん、やっぱり女の子には笑顔ですよね！

小学生にはなつたものの、今までと同じく、あまり外にでられない上に激しく動くことができないため、屋内で大人しく過ごすが多かったです。

周りに馴染んでるしょーくんも、よく私たちに付き合ってくれました。

しょーくんは優しいな。

行事もほとんど参加できませんでしたが、思い返せばなかなか濃い出来事が多いですねえ……………

懸念していたように、私の容姿や格好に対するいじめが起きて、しょーくんや千雨ちゃんにも迷惑や心配をかけてしまいました。

黙っていたらその内飽きるだろうと考え、無視していると、傘やサングラスを取られてしまい、さすがに私も焦ります。

その上、UV対策なしに外に引つ張り出されそうになった時は、さすがに泣きそうになりましたね・・・オソトコワイオヒサマコワイ……………

目を強い光から守るために瞋り、待っていれば返してくれるかなあと日陰で淡く期待して座っていると、それを知ったしょーくんが取り返してくれてとても助かりました。

・・・翌日、いじめっ子に震えながら謝られたのでとても驚きました。

しょーくん、何したの！？

私が千雨ちゃんとしょーくんを家に招いたときは、すっかり（私の）コスプレにはまっていた両親が、千雨ちゃんを気に入る、何故か緊急コスプレ写真撮影会が開催されてしまいました。

ちなみに、それをいち早く察した我が心友は、私と千雨ちゃんを餌に逃げ出しました。

もちろん見捨てた仕返しはしましたよ？

私と千雨ちゃんが、麻帆良は変だねと話していると、千雨ちゃんはストレスを吐き出す科の如く、嬉しそうに話していましたが、隣で聞いていたしょーくんがハラハラしながら冷汗を流していたり、何か言いたそうにしていました。

うーん、悩みがあるなら聞いてあげたいんですが、教えてくれないもんなあ・・・

体育祭が行われた時は参加できずに影で応援していました。

皆が外で一生懸命動き回っている中、日傘などを装備した私はかなり浮いており、上級生にもジロジロ見られて動物園の動物になった気分でした。

全く気持ちよくありませんね。

麻帆良祭では特に催し物をするのではなく遊ぶことになりました。やる気があれば稼げるとはいえ、さすがに小学生の一年生が稼ぐのは難しい上に、遊ぶほうがいいですね。

この祭りは皆は素直に楽しめるかもしれませんが、私と千雨ちゃんはそのごく変な気持ちで過ごしていました。

中学生までもが金稼ぎをし、妙に高い技術が溢れており、外から来たはずの人も異常を異常と思っ
てませんね。

何かしら事故とか起こってもアトラクションのような反応しかされません。

以前までなら、これがこの世界の普通なのだろうとスルーしていましたが、千雨ちゃんと常識を共有するようになって異常だと思ってしまうようになりました。

人が密集していて危なかったので、人の少なそうな所で適当においしいものを食べ、ぶらぶら回っていました。

二人で！

デート（笑）ですね！

しょーくんは他の子に誘われていましたが、途中から私たちと合流しました。

何故か不機嫌そうでしたね？

バレンタインになると、しょーくんが何人かの女の子（見た感じそこそこかわいい）にチョコをもらい、何人かの男の子に恨めしそうに見られていたのを、ニヤニヤしながら眺めていました。

戻ってきたしょーくんは特に嬉しそうではなく、私たち（見た目はさっきの子たちよりかわいい）を見てため息を吐いていました。

私たちからも欲しいか聞いたら「いらねえよ！」と否定されました。

時には、上級生の新聞部が行った校内ランキングの美少女部門（低学年の部）の上位に私の名前があると聞いて、いくら女の子に見られることに慣れてきた私でも久々に言葉がでなくなってしまうし

た。

千雨ちゃんは（私より下だったため）少し不機嫌になって私を殴り、しよーくんは思いつきり笑ったので私が殴りました。

さらに一、二年が経過したあるいい天気（曇り）の昼下がり、私はふと言葉にしました。

そつだ、図書館島に行こう。

その言葉を聞いた二人の反応は、

「あそこか、なんか凄いらしいからな。行ってみようぜ！」

としよーくんが乗ってきたのに対し、

「罨とかあるんだろ？ 危ないから止めないか？」

千雨ちゃんはあまり乗り気ではないようです。嫌そうです。

今までは用事がなかったですし、罨が仕掛けられたダンジョンがあるような変な所に行きたくなかったので敬遠していました。

しかし、地上部分は安全でまともだという話を聞きいたので、何か新しい刺激が欲しいと思っていたので行きたくなくなりました。

千雨ちゃんを説得し、地下には絶対に行かないという約束の下、放課後に図書館島散策ツアーに行くことが決定しました。

何か新しい出会いがあるといいですね♪

第四話（後書き）

ありがとうございました。

番外編 1（前書き）

入学式後の出来事です。

番外編 1

・入学式の後

緋音は式の時に出会った女の子——長谷川千雨を外の人に巻き込まれない位置に少しだけ待ってもらい、翔を呼びに行った。

向こうも緋音を探していたようで、数分もいらずにすぐに見つかり、翔を千雨のことを軽く話しながら案内する。

「千雨ちゃん、お待ちしました。あ、こいつは私の心友の宮部翔みやべです。」

「俺のことは翔って呼んでくれたらいいから、よろしく。心友っていうより幼馴染だな。」

「（親友ねえ・・・）初めまして、長谷川千雨です。」

男の子2人はにこやかに挨拶をし、女の子は少し愛想に欠けるが挨拶を返す。

小学校に制服はなく、見た目はサングラスをかけた少し変な女の子の緋音と、周りにいる新入生よりも落ち着いている男の子の組み合わせにちょっと疑問を持った千雨が何気なく疑問を口に出した。

「幼馴染とはいえ、男と女で仲がいいんだな？」

「あはは、何言ってるんですか千雨ちゃん。私、男ですよ？」

そついうと千雨ちゃんがビックリし、少し悲しそうになって「こいつもか・・・」とつぶやく。

紹介された方の翔も笑顔を引き攣らせ、「ああ、またか。」みたいな顔をした。

どうやら今までも何度かあったようで小学生に思えない程達観して

いる。

それもそうだろう、緋音に（親たちにひどく怒られたことから）助けられてからは緋音を外に連れ出したり、室内で遊んだりと一緒にいる時間が増えたことで、その機会は多くあっただろう。

「や、やっと私の話を聞いてくれて、普通に（髪白くて、目が赤いけど）仲良くなれそうな奴に会えたかもと思ったのに……」

「？ 千雨ちゃん、どうし……」

緋音（男の娘）がどうしたのかと近づくが、女の子はビンタをかましながら叫ぶ。

「お前もかー！」

「（バチーン！）へぶっ！ ち、千雨ちゃん？ ちよっ、千雨ちゃん！？」

千雨は泣きながらどこかへと走って行き、緋音は追いかける。

翔はいろんな意味で取り残されてポツーンと立っていた。

ハッと気づいたころには、二人を見失ってしまう。

「教室移動なのにどうするんだよ……」

とりあえず、その場から少し離れて先生に見つからないようにする。心配しながらも緋音たちを追いかけて、教室に先に行くこともせず、待つことを選んだ彼は何気に優しい。

しばらく待っていると、二人が走り去った方向から手をつないで駆け寄ってきた。

ちなみに、千雨が頬を赤くして嬉し恥ずかしそうにしていたのを見

た翔が、笑顔の心友を思わずぶん殴ったのは仕方のないことだろう。

その後、急いで三人ともそれぞれの教室へと向かい、先生に心配させることとなるのは蛇足である。

第五話（前書き）

作者は原作を知らないので、捏造しまくるでしょうが勘弁してください。

第五話

図書館島。

それは麻帆良湖に浮かぶ（浮かんでないよね？）世界最大規模の巨大図書館。

2度の大戦の戦火をさけるため、世界中から様々な貴重な本が集められてできたそうです。

蔵書の増加に伴い地下に向かって増改築が繰り返されたために現在では全貌を知るものはいらっしゃらないそうで、その実態を調査する中・高・大合同サークル「図書館探検部」なる部（地下に罫を仕掛けていることを考えると、どえらいハードな部活動ですね？逆に迷惑なのでは？）も存在していると聞きました。

（wiki参照）

・・・なんでやねん。

おおっと、すみません。あまりの出鱈目さに意識が飛んじやってましたよ。

。爆とか落とされるような国になんで世界中の貴重な本が集まるんでしょーねー？

となりで千雨ちゃんも一緒に突っ込んでますよ！

・・・しょーくんは笑ってますけど、冷や汗でてません？

地上部分は安全らしい（図書館に安全じゃないところがあるのがツッコミどころですよね？）ので、見て回りましょう。

ほらほら、千雨ちゃんもしょーくんも行きますよー！

いやー、これだけ広くて高い建物の地上部分にあるだけでもものすごい蔵書量ですね？

大きな本棚が整列して立ち並んでいますけど、本の森とでも表現できそうな程広い上に多いですね。

迷子とかでないのかな？

どうせだから皆で手を繋いでいきますか？

「いや、俺はいいよ。千雨ちゃんと繋いだら？」

「ばつ、馬鹿言うんじゃないよ！ 手なんか繋がなくても大丈夫だよー！」

あら？そつですか？残念ですね。

最近片手（日傘を持たない方）がさみしいな、と思っていると、

おどおどした様子が庇護欲をそそる、前髪で目が隠れた少女を発見しました。

おや、これはいけませんね。

紳士（笑）たるもの困った女性には手を差し伸べねば！

ということで、さっそくアプローチ開始です！

「（また新しいフラグか？）」

「（むっ……。いや待て、そう、緋音は人助けが好きな奴なんだ。だから問題ない。あれ？じゃあ私も……。）」

後ろの呆れと怒りと悲しそうな空気はスルーして、

こんにちは御嬢さん。何かお困りですか？私でよければ喜んで手を貸しますよ。

私に気づいた少女はビクツと小動物的^{かわいいなあ}反応をしながらもこちらに向き、「ひうつ」っと鳴いて一歩下がりました。

あれ？ おかしいな？

目から何か熱いモノがでてきそうです。私何かしましたか？

その反応は悲しくなるんですけど……（少しいじめたくなったのは気のせいです！）

「え……っあ、あの、すみません。その、ちょっと（サングラスとか白い髪とかに）びっくりして、あ、その……」

……ぐはっ

クツ、こんなところでこんなモノ（皆で協力して守っていくべきモノ）に出会うとは・・・

人生何があるか分かりませんね。

後ろの怖い視線には気づきません。ええ、ス「おい。」ルー不可能でした。

「結局どうだったんだ？ その子迷子なのか？」（しょーくんナイス！）

今聞くとこですよ。

ええ、だから千雨ちゃん？ その固く握った拳をひらいてください。

「なるほど、ビンタがいいのか。」

断定しないで！

まず叩くことを選んた「あの・・・」あ、放置してすみません。

それであなたはど・・・

我ながらいい反応ができたと思います。

私たちを横切った台車が倒れてきて、その上に積まれていた段ボールの山がこちらに倒れてきたんです。（反対側からふざけて走っていた男子がぶつかったのと、それに驚いた運搬者が台車をつかんだまま横に倒れたからだそうです。ちなみにその人たちは無傷。）

近くにいた千雨ちゃんをしょーくんの方に突き飛ばし、ついで迷子（？）の女の子をを反対方向に勢いよく突き飛ばし、逃げ遅れた私は腕で頭を庇うようにして衝撃に備えました。

重そうな荷物ですが、頭を守れば死にはしないでしょう。

しかし、こんなアクシデントは今までなかったのでついつい思っちゃいますね。

誰か助けしてくれるとうれしいな・・・

・・・（フワッ）・・・ドサドサドサつと物音がして、待つこと数秒・・・あれ？ 痛くない？

目を開けてみれば迷子（？）の子は目を回し、千雨ちゃんにこちらを見えないように抱いて距離をとっていたしょーくんは目を見開いて驚愕の表情を浮かべ、台車を押していた人は目を覆っており、知らない男の子が台車のそばで転んで痛そうにしていました。

あれ？ 私って運がよかったんだなー、っと思ってしょーくんの方を向いたら、

「千雨ちゃん、悪いけどあの子見てもらっていいかな？ ちよつと緋音保健室につれていくから。ほら、いくぞ！」

「わ、わかった。」

冷静なように焦りながら、しょーくんは私たちに指示をだし、私の腕をつかんで駆け出しました。

ちよ、しょーくんストップ、ストップ！携帯取り出して話始めんな！せ、せめて傘！傘だけでもないとわたs・・・ぎゃ——！！！！！！！！！！

・・・もう少しで私はUV対策なしで晴れてきた外に連れ出されるどころでした・・・オソトコワイオヒサマコワイ（がくがくぶるぶる）・・・

「・・・あ、師匠ですか？問題が発生したので至急相談したいんで

すが
・
・
・
」

第五話（後書き）

ありがとうございました。

第六話（前書き）

ちよつと無理やりな感じですが、独自路線でいってみようと考えています。

主人公はちゃっかりチートでした。

第六話

「ほっほっほ、君が魔法を使ったからじゃよ。」

麻帆良学園本校女子中等学校の学園長室、私はそこにいます。

私の他には、目の前に学園長めがうりひょうんが机に座っており、隣でしょーくんの
師匠だとかいう人が報告して、私の側にこちらをちらちら見ている
しょーくんがいます。

あの後、しょーくん（あの後、肉体言語でOHANASHIしました）の師匠（高校の先生らしいです）と合流し、この場所まで連れ
られてこられました。

悪いことなんてしてないのに、悪いことしたみたいでびくびくして
いましたが、とりあえず聞いてみました。

あのー、なんで私はここに連れてこられたんですか？

笑顔です。ひきつつっているかもしれませんがとりあえず笑顔で尋
ねます。

それに対する返答が、最初の言葉でした。

本来なら、この人頭大丈夫かな？とか思うんでしょうが、私も自分で理解できていない不思議な体験をとっくの昔に済ませていましたし、この土地が変なのはわかっていたので、すんなりと受け入れました。

ええ、ぬらりひょん学園長がいうんだから説得力ありますよね！

「なぜか釈然とせんが、とりあえず魔法が実在することは理解してくれたかの？」

理解しましたよー。バッチリです。

妖怪が魔法ってどうよ？とも思わないでもないですが、現状把握です。

でも、できれば実際に見てみたいんですけど？

「じゃあ俺が見せるよ。プラクテ ビギ・ナル “火よ灯れ（アールデスカット）”」

ボッ

側にいたしょーくんが伸縮できる杖を取り出し、呪文を唱えます。

おおー、火ができました！

夢がありますねー、ファンタジーですねー。

しょーくんも使えるんですか。いいな。

「ふおつふおつふお、魔法は秘匿されており、本来なら一般人にばれたら黙っていてもらうか、記憶を消させてもらっているんじやが・・・」

なんか物騒な言葉が聞こえましたけど・・・ああ、私が使ったから問題になったんですね？

・・・使ったんですか？自分じゃよくわからないんですけど？

「お主の隣にいる宮部くんが、お主が風の魔法らしきものを使ったのをちゃんと見たそうじや。」

そうなんですか？

私が魔法を知らないのは、しょーくんもよく知っていると思います
が？

「ああ、緋音に魔力があるのは分かってたけど、魔法を知ってるようでもないからびっくりしたよ。」

ふうん。そんな簡単に使えるもんですかね？

さっき杖もって呪文唱えてましたけど？

「そこじゃ。」

へ？

「儂からみてもお主はそんなに魔法の才能があるように見えない上に、杖のような触媒をもっているというわけでもない。なぜじゃ？」

いやいや、知らないですよ？ プロにわからないものをどう説明しろと？

魔法、魔法ね？ 風がでたんですよ？

どうやって？ うん？

風よ！　なぐんちゃ・・・

その日、帰宅中の生徒たちは学園長室の全窓がぶっ飛んだのを目撃した。

第六話（後書き）

ありがとうございました。

第七話（前書き）

魔法の解釈が間違っていたらすみません。

第七話

居づらいです・・・

ものすごく、居づらいです・・・

部屋の中はぐちゃぐちゃで、机や椅子はひっくり返し、壁に傷がつき、窓は大破。私以外の皆さんの恰好はよれよれで、不機嫌そうな表情を隠そうとされていますが、怒りマークがはっきり見えます。

「それで・・・どうやら君は風を操れるようじゃの。」

重苦しい空気の中、学園長が私に疑問、いえ事実確認をしてきました。

いえいえそんなことできるわけないじゃないですか!?

ちよつと言ってみただけです。言っただけなんですよ!

「じゃが、この現状をどう説明するのかね?」

「そうだぞ! さっきものすごい風だしたじゃねえか!? 壁に頭ぶつけてコブできたんだぞ!」

しょーくん、私に近い分すごい勢いで飛んでいきましたもんね。

ちょ、タンマ、そんなに揺すらないで下さいよ。

と、とりあえず落ち着きましょう！ ごめんなさい、だからその手を放してー！

息と服が乱れてしまったので、息を整えるのと一緒に服も直しておきます。

一息入れ、学園長たちの方をむけば、私を睨んでいるというより、観察しているようでした。

えーっと、さっきの言葉は言わない方がいいですかね？

「そうじゃな・・・（言霊？いや、それじゃと今まで何もなかったというのはありえん。無詠唱魔法だったとしても、あれだけの風を起こした後で彼の魔力が減った様子はないしのう？ ふむ？）」

学園長は私の疑問に答えながらも、別のことに意識を向け始めました。

うわー、どうしましょ？ 向こうで話し合い始めちゃいました。

私っていつ爆発するかわからない爆弾みたいですね？

あははは・・・

私は学園長たちの話に加わることができませんので、しばらく結論がでるのを待つしかないんでしょうね。

怒っていたしょーくんはコブが痛むのか、不機嫌そうにその場所を抑えて静かにしています。

うーん、それにしても部屋の状態が酷いですね？

こういうのをパパッと魔法で直せないんでしょうか？

しょーくん？ お掃除とか物の元通りにする魔法とかないんですか？

「いや？ あるとしても俺はしらねえ。だいたい俺の習っている一般的な魔法ってのは、杖とかの触媒を通して魔力を周りの精霊に渡して、詠唱することで魔法を発動させてるんだよ。火とか水と光とか。」

何気に手間がかかりますね。詠唱は知らない言語でしたし。

それにしても、精霊がいるんですねー。

魔法は自力じゃなくて、精霊にこちらのお願いを聞かせて発動してもらう……ふむ？

わざわざそんなこと（詠唱や発動体の準備）しなくても頼めばいいんじゃないんですか？

例えば、精霊さんお水くださいっ……

放課後遅くに帰宅しようとしていた学生たちは、学園長室の窓から大量の水が流れ出るのを目撃した。

第七話（後書き）

ありがとうございました。

第八話（前書き）

相変わらず短いですが、とりあえず載せます。

第八話

放課後の学園長室、そこはもはや見る影もなくなりつつあり、グシヤグシヤのビチョビチョでした。

空気が再び悪くなり、心なしか先ほどより大きな怒りマークがみえます。

「……………ほう、精霊にお願いしたとな？」

はい、そうなんです…………出来心だったんです…………

だから、その…………えっと…………

…………許して？

(ゴン！) あでっ！？　しょーくん、痛いですよ？

「反省しろ。」

ごめんなさい！

「学園長、もしかしたら白峰君は精霊に好かれているのではないでしょう？それもとてつもなく。」

「うむ。そう考えた方がいいかもしれん。（しかし、本当にどうしようかの？あやつに知られると面倒じゃし・・・いや、いっそ押し付けるのもありかもしれん。）」

「とりあえず、今日はいったん帰しましょう。風邪を引かせても問題ですし・・・なんでしたら、翔と一緒に私が様子をみますよ？」

え？ い、いいんですか？ 私、迷惑ばかりかけましたけど？

そして学園長！ 何やら妙なことを考えていませんか！？

「はは、確かに大人げなく怒ったりもしたけど・・・困っている生徒を助けるのが仕事柄だからね。気にしないでいいよ。」

「ま、お前なら俺もいいよ。ただし、もうちょっと気をつけろよ。」

あ、ありがとうございます！

しょーくんもありがとー！さすが我が心友だね！

「ふおっふおっふお、君たちは早く帰りなさい。ああ、保健室に寄ってタオルを借りるといい。白峰君、くれぐれも魔法とかについて誰かに話さないようにの？」

はい、ありがとうございます。それじゃあ失礼します。

「失礼します。」

そうして、やっと私たちは帰宅しました。

翌日、心配した千雨ちゃんに怒られました・・・

「聞いてんのか！」

はい！聞いてます！

第八話（後書き）

ありがとうございました。

第九話

どうにかこうにか千雨ちゃんを落ち着かせ、私は気づきました。

そう、千雨ちゃんもこの土地がおかしいことに気づいていて、周りのみんなと意見が衝突しがちだったんですね。

私たちがいたから結構ましになりましたけど、独りだったら人間不信になっていたでしょうね？

うわー、皆から嘔吐きとか言われると思うとぞっとしますね・・・

しかも自分も周りも子供ですからね・・・良くも悪くも

気づいてしまったからには、その不安を取り除いてあげたい。

子供を守るのは大人（笑）の役目ですからね！

とりあえず、教えるかどうかをししょー（しょーくんの師匠——森^{もり}里^{さと}景^{けい}一^{いち}先生、バイクが趣味——のこと。私もそう呼ぶことにしました。）に相談することにしました。

ししょー、実は私の友達に昔から麻帆良が変だっけ気づいてる子が一人いるんですけど、魔法のこと話しちゃだめですか？

「何だって？・・・ああ、翔が話してた子だね？　翔？　その子

に認識障害はやっぱり効いていないのかい？」

「はい。前にも言いましたが千雨には効果がないみたいでした。」

あら、先にそういう話してたんですね？

「うん。とりあえず、君たちがいれば大丈夫かな、と思って黙っててもらったんだ。下手に教えると色々和不味いからね。」

出来れば教えてあげたいんですけど？

千雨ちゃんは常識がしっかりしてる分、時々辛そうにしていましたから・・・

「あゝ、ごめんね。気が回らなくて。君は大丈夫だったのかい？」

「そうだよな。お前大丈夫そうだから、千雨も大丈夫かと思ってたぜ。」

む！ しょーくん、それはいけません！ 紳士（笑）たるもの女の子を大事にしないと！

「いや、千雨が弱み見せんのは大抵お前にだから。それに俺は男女平等だ。」

「ははははっ。うん、教えて大丈夫だよ。学園長には俺から伝えておくから、その子の不安を解消してきてあげて。」

はい！ ありがとうございます！ では早速。

千雨ちゃんに電話をかけようと思いますが止められます。

「明日にしたらどうだ？ 今からじゃ遅くなるだろうし・・・それに、お前は早くその体質？をどうにかしないとな。」

ぐっ、そうでした。 昨日は大参事でしたもんね・・・

「それじゃ、さっそく試していこうかな。 まずは魔力を操作してみようか。 本当なら、杖をもって初心者呪文を唱えて練習しているんだけど。 君の場合、魔法使いになるのが目的じゃないし、下手に呪文唱えると何が起きるかわからないもんね？」

す、すみません。

しよーくん、苦笑いしないでください、距離を取らないでください。

「いや、昨日お前のそばにいたから余計に、な？」

すみませんでした！

まあ、ばちばち始めましょう。 こういうのは切り替えが大事です！

魔力、魔力と。

目を閉じて、静める、鎮める、沈める。

意識を体の内側に。

周りの音が消えていき、心臓の音が聞こえ、血の巡りを感じる。

体の中心ではなく、奥へ、奥へと。

意識を、感覚を這わせて、広げて、探っていく。

・・・ある。

力を感じる。

優しく、恐ろしく、温かく、冷たい、力を感じる。

自分に、大気に、大地に、生命に。

それに触れる。

そしてそれを・・・

「・・・ん・・・くん・・・白峰君!」「・・・ね・・・
かね・・・緋音!」

うおっ! ど、どうしたんですか? 何か問題が!?

「いや、何だか不味い雰囲気だったんで止めさせてもらった。」

「そうそう、お前何しようとしたんだ？　すげー寒気がしたぜ・・・
こう、ヤバイって！」

いや、魔力を操るうにも感覚がわからなかったんで、集中して探っていたんです。

それで、自分だけじゃなくて、この空気中とか大地にある何かがあるだろうなと思って、こう、集めようと・・・

「か、感じただけじゃなくて？」

ええ、あとちょっとでガツと集めて取り込められそうでしたよ？

あれ？　何でそんな理解不能なものを見る目で私を見るんですか？
普通じゃないんですか？

ちよっと！　ししょー、考え込まないで！

「白峰君、君は・・・」

はい！　何でしょうか！？

「君は、魔法使いになるべきかもしれない。」

・
・
・
え
？

第九話（後書き）

ありがとうございました。

第十話

翌日、千雨ちゃんに放課後の時間を空けてもらい、魔法について話をすることにしました。

千雨ちゃん、実は魔法は実在したんですよ！

「あ・・・緋音、頭でも打ったのか？ それとも早い中二病か？
大丈夫、大丈夫だから。私はちゃんと受け止めてあげるから。
安心して・・・」

あれ？ 心配してくれるのはうれしいんですけど釈然としませんね？

「千雨はとりあえず落ち着いて。 緋音は端折りすぎ。 あのな？
まず・・・」

おっと私は放置ですか・・・

「・・・ということで、お前はちゃんと常識持った一般人なんだよ。
」

「そう・・・か。・・・緋音たちは魔法のことは最初から知って

たのか？（私だけ仲間外れなのかな・・・？）」

「あゝ・・・それなんだが、図書館島に行った時こいつ段ボールにつぶされかけただろ？あの時に緋音が魔法使ったみたいだったから連れ出して、その後俺が師匠たちと会って説明したんだよ。だからそれまでこいつはただの一般人だったよ。」

「そ・・・そうか。（ホッ）翔は違うんだな？」

「ああ、俺は最初から魔法を知ってたよ。おい、緋音。話終わったぞ。」

（ボーッ）おおう！？終わりましたか。

それじゃあどうしましょ？皆で遊びにいきますか？

「そうだな。千雨は？」

「ん、大丈夫だ。どこ行く？」

そうして、私たちは遊びに出掛けることにしました。千雨ちゃんが元気になったようで何よりです♪

そして、私は昨日の会話を思い出しました。

え？ 魔法使いにですか？

「うん。 正確には自分の身を守るだけの力を持った方がいい。君は狙われやすいだろうからね。 さっきのことといい、精霊に好かれているだろうという君の体質も。」

狙われるんですか？ 黙っていればわからないんじゃない？

「いや、わかる人にはわかるだろう。 実際、学園長には君が精霊に好かれているだろうというのがバレてるし、他にも分かりそうな人物がいる。 学園長は甘いところもあるけど、腹黒いからね。使えるモノは使おうとするだろう。」

ハア・・・ 何に使うんですか？

「日本有数の霊地であるこの土地そのものや、多くの貴重な魔道書が保管された図書館島、あの世界樹『蟠桃』などが狙われていて、襲撃者が絶えず侵入を図ろうとしているんだ。 それを防ぐために、

主に立派な魔法使い（マギステル・マギ）、所謂正義の魔法使いを目指している魔法先生や魔法生徒といった魔法使い達が夜に警備員として防衛しているんだ。本国から派遣もしてもらっているんだけどまだまだ人手不足で、有能な人材は常に求められているんだ。」

「すみません。正直に言わせてもらうと、その話を聞くだけで色々突っ込みたいんですけど・・・」

「ん？ 何だい？」

えーつと、じゃあ、なぜ襲撃するところに一般人が生活する場をつくったんですか？ でっかい公園つきの博物館とか美術館とか建てて夜だけでも一般人入らないようにしたらよかったんじゃないですか？

「ははははは、そうだね。守るだけならそれでもつとやりやすかったかもね。でも、おそらくは他の、そう例えば魔法を習う子供達がいてもおかしくない環境をつくろうとしたんだろうね？」

ああ、なるほど。じゃあ本国ってどこなんですか？

「ああ、分からないよね？ この世界とは違う魔法世界、まあ異世界がそんざいして、そこにあるメガロメセンブリアって国がこの麻帆良の上部組織なんだよ。まあ、上司と下っ端の関係といえればわ

かりやすいかな？」

あれ〜？ 疑問がさらに増加したんですけど！？ これ、いつまでも疑問が尽きないような・・・

えっと、なんで先生や生徒、特に生徒が警備してるんですか？

「日常で正体を隠していたり、人手不足っていうのもあるだろうけど、正義の魔法使いとなるための試練みたいな感じかな？」

だめだ！ 私には理解できない世界だ！

突っ込んだじゃだめだ、なんで朝昼働いて夜も働いてんだよ、とか突っ込んだじゃだめだ！ いつまでも終わらない。

え〜、あ〜・・・じゃ、じゃあ、最後に、立派な魔法使い、正義の魔法使いつてなんですか？

「それは本国に実力の認められた魔法使いが名乗れるようになるんだ。世のため、人のために陰ながらその力を使う、魔法世界で最も尊敬される仕事の一つだよ。こういうのは誰かの許可がいるものじゃないとは思っているんだけどね・・・正義正義ってうるさい人が多いから気を付けた方がいいよ？ 絡まれるから。」

し、ししょーは他の人とは考え方が違うんですね？

「うん。俺はこの世界で育ったし、流れで魔法使いになったところがあるからね。・・・ガキかよって思っちゃうんだよねえ。」

「っ、こわっ！」

はあ・・・ま、先のことは置いて・・・自分のことを何とかしましょう。

今のままだとまだ爆弾みたいなもんですもんね・・・

「おい。どうした？」

なんでもないですよ。

第十話（後書き）

ありがとうございました。

番外編 2（前書き）

千雨に魔法のことを話して数日後の帰り道での話です。

番外編 2

・ある日の下校中

「そういえばしょーくん。何で私達だけ皆と違って一般常識を持っていたんですか？」

「「は？」」

学校が終わり、いつもの三人で下校していると、緋音がふと思い出したように翔に疑問を尋ねる。

周りにはちょうど人が少なく、大声で話さなければ誰にも聞こえない。

すると、翔だけでなく、千雨まで足を止めて「何言ってるんだこいつ」という反応を返した。

「な、なんですか？ その反応は？」

「いや、私より先に事情（魔法のこと）を聞いていたのに何で知らないんだよ？」

「そうだ、千雨に説明したときも言っただろうが。」

「聞いてませんでした。」

「（怒）・・・はあ、ダメだこいつ。」

「何で気にならなかったんだよ？」

「だから、今気づいたんじゃないですか。」

「「遅いわ！」」

ドンツ！と二人の同時ツツコミが緋音に炸裂する。

翔が緋音の耳元に口を近づけて周りに聞こえないよう注意する。

「いいか。麻帆良には結界が張ってあるんだよ。主な結界の効果は、

二つ。魔物の弱体化と強力な認識阻害だ。この認識阻害が一般人に危険を危険と思わせなかったり、不思議なことも不思議に思わなくさせてるんだよ。」

「え、危なくないですか、それ？」

「やっぱりそうだな。緋音の影響かあの時はあんまり気にしなかったけど（一度に大量に教えられたしな）。」

「あ、でもそれがないとあの世界樹とか図書館島とかの異常さが麻帆良の外にまでばれて不味いんだよ。魔法使いの仕事にも影響するから・・・」

そのように三人で寄り合って話していてもちゃんと周りに誰もいないことに気を配っているようだ。横断歩道に近づいた時も青信号に変わったことを確認してから渡ろうとする。

その時、車が一台こちらに突っ込んできた。どうやら信号が変わったのに、スピードを上げて無理やり突っ込んできたようだ。

三人の姿はちゃんと前を見てれば確認できただろうに、ブレーキをかけても間に合わない距離になってからドライバーは彼らに気づくそれにいち早く気づき、反応できた翔が二人をひつつかんで後ろの歩道へと戻るように跳ぶ。緋音の手から傘がとび、二人とも目を白黒させている。

車は自分たちのいたところを少し過ぎてから止まった。

そして、ドライバーが下りてきて言う、

「おい、嬢ちゃんたち、大丈夫か。ごめん、ごめん。」

「「な・・・!」」

千雨と翔が憤るが、緋音が二人の手を掴み、俯きながらも翔と千雨を止める。

「っ・・・緋音!」

「・・・・・・・・」

「じゃあ、嬢ちゃんたちも気をつけろよ。」

緋音は頭を横に振ることで翔を再び止める。

そして、ドライバーは自分のしたことに反省の色が見えず、それどころかこちらにも注意して、発車させて行った。

「緋音！ 何d・・・」

千雨と翔が緋音に詰め寄るが、緋音の様子に言葉が詰まる。

彼は歯を食いしばり、己の感情が高ぶるのを必死で耐えていた。

怒りで精霊を暴走させないためか、または相手が先ほど話していた認識障害の影響を受けているからと納得させようとしているためか、身を震わせて耐えていた。

翔も千雨もそんな緋音の姿に何も言えなくなる。

そうやってしばらく彼らの間で沈黙が続く。

周りにいた何人かの通行人が話しかけてくるが、目の前で子供が事故に遭いそうだったとは思えない反応である。

「ふう・・・帰りましょうか？ 皆さん、私たちは大丈夫ですよ。

ご心配どうも。」

「（緋音・・・）そうだな、帰るか。」

「（はあ、こいつは何で昔からこう・・・）了解。またどこかに遊びに行こうぜ。」

そうして彼らはそれぞれの家へと帰って行った。

さっきのことを忘れるように、次はどこへ遊びに行こうか話し合い、雑談していた。

「やっぱり認識阻害っていいですね？」
「うん。」
「」

番外編 2（後書き）

ありがとうございました。

第十一話（前書き）

再び時間が跳びました。

第十一話

あれからも私たちは順調に成長し、背も伸びました。

私は、相変わらず日に当たることができなかったので、肌は白くて無駄にキメ細やか。筋肉がつきにくい上に、そんなにハードな運動はしているので体は細いです。

髪も伸び、邪魔になつて切ろうとしますが、両親（「せっかくキレイなんだから！」「そうだぞ、おもさ・・・かわいいのに！」）+ 千雨ちゃん（「ダメだ！もつたないだろ！」）の妨害に遭い、伸ばしっぱなしで、女の子見たいです。

外を歩くと、「かわいい」「キレイ」「美少女」「ま、まさか男の娘！？」とか言われるのにももう慣れました。

ただ、女性の（妬みとかの）視線には慣れません・・・

千雨ちゃんに魔法のことを話してからも、色々大変でした。

図書館島で迷子（？）になった子が私にお礼を言いたいとのこと
で、会いに行けば、かわいい女の子の知り合いが増えました。

こんにちはー！ あの時はお互い災難でしたね？

ごめんなさい、咄嗟に突き飛ばしちゃって。 大丈夫でしたか？

あ、よかったです。 お礼？

いいですよ、女の子を守るのは男の務め・・・え？ ああ、私これ
でも男なんですよ。

どうしました？ あのだい・・・何で気絶！？

・・・かわいい。

はっ！ ち、千雨ちゃん落ち着いて！ 落ち着いて話し合いましょ
う？

いやO・H A・N A・S H Iって、それ肉体言語では！？

しょーくん、そこの御嬢さんたち、た、助け・・・

また、ある時は、忘れられない思い出ができました。

いったい何ですか？ 撮影会？

・・・前もしましたよね。

記念になる？ そりゃ忘れられそうにありませんがね！？

くっ、千雨ちゃんは？

だめだ、こっちにフリフリの服もって迫ってくる！

こうなったらしょーくんだけでも・・・逃げやがったなあんにやろ
う！

っ、捕まってたまるもんですかー！

魔法、というより魔力操作の訓練では新たな発見ができました。

えっと、自分の中にある魔力だけを動かして・・・

こう？ こうですかね？

あ、自分に魔力を流して強化できるんですか？

じゃあ、目に流れるように直結してみると遠くの物が・・・

ぎゃー！ め、目があああー！！

サングラスかけてるのにまぶしいです！ 何か小さな光みたいなの
が大量に見えます！

あ、これが精霊ですかね？

魔眼？

何それ怖い。

他にも遠出してハプニングが起きたり、自身の能力を抑えるのに四
苦八苦したり、学園長が私のことを期待していたり、新しい出会い
があったり、千雨ちゃんが暴走したり、心友の特訓につきあったり
とドタバタした毎日でした。

桜が咲き誇り、春の暖かな風が眠気を誘う、よく晴れた日のこと
です。

今日は中学校の入学式です。

今日から男女別に分かれた学校で、入寮して過ごすこととなります。

お母さんは「早く帰ってきてね。」と心配し、お父さんは「気をつけるよ、特に周りに襲われないようにな?」と笑いながら見送ってくれました。

もちろんお父さんにはお母さんからの鉄拳制裁が下されました。

ただ、その時の「シャレにならないこと言っんじゃありません!」って言うことは、お母さんも理解してるんですね・・・

周りを見れば男男男、女性は先生の中にちらほらいますがほとんどが男のそんな集団の中に私——サングラスをかけ、日傘を常備しているアルビノの男の娘——はいます。

メツツツチャ見られてます。

他の小学校から来た子や先輩も大勢いるので物珍しいのでしょうか。

ジロジロこちらを見ってきます。

怖い、怖いです! 何が怖いって一部が息を荒げてこっちを血走った目で見てくるんですよ!?

しょ、しょーくん、ヘルプ! ヘルプ!

逃げないで! 私を置いていかないでー!

離れて歩こうとする我が心友の腕を片手で抱きつき、逃がすまいとすれば、周りの視線に黒いモノが混じって重圧が増えました。

「は、離せ! 今の状況でそれはヤバイ!」

ダメですー。 逃がしませんー。 死なばもろともですー。

はあ、癒しが欲しい・・・

第十一話（後書き）

ありがとうございました。

第十二話

さて、今私は1-Cの教室の一番目の当たらない廊下側の一番後ろの席に座っています。

本来なら出席番号順で座るんですが、私の体質を鑑みてこの席を指定されたみたいです。

今度はこの席で一年過ごすんですね。

翔君と同じクラスになったのはラッキーでした。

あんまり親しい人いませんでしたからねえ（いじめの件とかで近寄りがなかったから）・・・

あれ、目から水が・・・

入学式が終わると、新入生は言われた通り、あらかじめ張り出されていたそれぞれの教室に入りました。

これから先生からの挨拶や連絡、軽い自己紹介、教科書の配布などが行われるようです。

今はその先生を待っている状態なんですが、周りを多くの野郎どもに囲まれています・・・

「名前は？」「どこから来たの？」「男だよね？」「外人？」「日本語わかる？」「なあなあ、なんでサングラスしてんの？」「何で髪白いの？」「長袖暑くない？」「ずっと前から好・・・」「スリサイズは・・・」「俺とつきあ・・・」「てめえら！ 抜け駆けすんじゃねえ！！」

ぐああああ、煩い！ 暑苦しい！ 私は聖徳太子じゃないんだから一度にたくさん言われてもわかりません！

そして、最後の方！ 変なこといいませんでしたか！？ なんて乱闘し始めてるんですか！？

何でついこの間まで小学生だったのに何でそんなに変にテンション高いんですか！？

誰かー、たーすーけーてー！ って、誰も知り合いいねー！ しよーくん！？

式の前から異様な雰囲気は感じていましたが、このような状態になるとは！？

恐るべき思春期のパワー！

そうして苦笑いしていると先生がやってきました。

「おーい、席につけ。 さっさと始めるぞ。」

これで助かった！と思いきや、一部の騒いでない男子だけが聞き入れ、私の周りのほとんどの奴らは相変わらず騒いでいます。

避難していたしょーくんもちやつかり座っていやがります。

「は、全く・・・ 先が思いやられるな。 いい加減にしるお前ら！ 初日から手間とらせるな！（ズババババン！）」

「くくくくわっ！？ あ、頭がく！！」「くくく」

騒いでいた全員が頭を押さえて蹲り、転げ回りました。

そして、その背後には左手に出席簿、右手にチョークを持った鬼がおりました・・・

勇気ある無事だった生徒が先生（鬼）に引き攣りながら質問しました。

「せ、先生？ やりすぎでは？」

「愛の鞭だ。」

また、いち早く立ち直った野郎の一人が、

「先生！ 愛を感じません！」

「じゃあ、教育的指導だ。」

()()(じゃあ!)()()

「指導なら言葉で「肉体言語だ。」・・・」

()()(それ言葉じゃねえ!!!)()()

「早く座れ。 なんならもうい・・・」

ズザッ!!

先生が言い終わるより速く、痛がっていた野郎どもは各々の席に着席し、シーンと静まり返りました。

「よし、俺がこのクラスを担当することになった深山^{みやま} 高海^{たかみ}だ。さつきみたいにあんまり迷惑なことするなよ? やるならべれないようにしろ。」

()()(だめだ! この先生!)()()

「後、その白い奴はアルビノで、日に当たらないようサングラスとか日傘とか差すらしいが、変なちょっかいかけないように。じやあ自己紹介でも・・・」

そうして、連絡なども終わらせると先生は帰っていきました。

個性的な先生でしたね? もう誰も逆らわないでしょう。

先ほど騒いでた皆さんも私に理解を示してくれたみたいで、うれしかったです♪

中には同じ小学校の子たちもいて、話しかけてくれたりしました。

「騒いで悪かったな？　これからよろしく。」「お前アルビノなのか？　っていうかアルビノって何？」「馬鹿だな、いいかアルビノってのは・・・あれ？　何だろ？」「何か手伝えることがあれば言ってくれよ？」「友達になろうぜ？」「今日から同じ寮に住むんだよな？　よろしくー！」「今まで敬遠しててごめん。」

あはははは、皆さん、私見た目がこんなんですけどよろしくお願いします。基本的に日に当たらなければ大丈夫です。残念ながら外と一緒に騒げないですけど・・・

いやあ、クラスの皆さんはいい人ばかりですね？　これからの学校生活は今まで以上に楽しくなりそうです！

今日から私たち寮に住むですよ。　しょーくん、楽しみです
ね？

あれ？　何だか乗り気じゃありませんね？

はあ？・・・ああ、今日から夜の警備に出たりするんですか？
大変ですね？

何とか中学校まで待つてもらってたんですよ？

頑張ってください！　しょーくんなら強いですから大丈夫ですよ！

え？　いや、私は魔法生徒じゃありませんから！

私が争い嫌いなへなちよこながよく知ってるじゃないですか？　いや、確かに精霊さんたちをお願いすれば割と何でもできますけど・・・

これを機につて、巻き込む気満々ですか？　逃げるだけならできそうですのでこれ以上強くなるうとは思っていませんよ？

だいたい、魔法唱えてみたらしょーくんとししょーが禁止したじゃないですか？　無理に従わせて命令するみたいで嫌いです・・・

おっと、新たな生活の場にとっちゃくつと。

立派で大きいですね。　ほとんどの家具もそろっているらしいですし。

荷物は送ってありますし、部屋割りを確認しに行きましょう？

そうして、私たちは寮の中に入り、玄関ホールに張り出されていた部屋割りに従って移動します。

しょーくんとは一緒に、学年ごとに階が決まっているわけじゃなくて、卒業して空いた階の部屋に入るみたいでした。

どうやら私たちは三階の奥みたいですね。

今日は新入生歓迎パーティーがあるみたいで楽しみです。

・・・パーティーではまたもや私が目立ってしまいました。

後、何人かの生徒が私をみて顔を赤くしたり、写真を買っていたのは見なかったことにします。

いちいち気にしてられません。 慣れました！

いや、慣れるべきではないんでしょうけど・・・

第十二話（後書き）

ありがとうございました。

第十三話（前書き）

PV28、866アクセス ユニーク4、138人 と知ってビ
ツクリした怠けMONOです。

のんびり書いていこうと決めた矢先に、これでしたので、あわてて
続きを書きました。

これからも、よろしくお願いします。

この小説は、私視点で固定しているので、翔や他の視点の話は番外
編などですれ暇があれば書いていきます。

第十三話

賑やかなパーティーが終わり、私たちは部屋へ戻りました。

いや、すごかったですね！

先輩達も楽しい方々でしたし、昔ながらの伝統とかがまた趣ありますよね。

あっちこっちから部活の勧誘とかされましたけど、何故か乱闘に発展していましたね？

「俺たちの部に入るんだ！」「ウチのマネージャーだ！」「てめえら、何抜け駆けしてんだ！」とか聞こえてきましたけど、私って女の子扱いですか？

他の冷静な格闘系とか運動系の先輩が抑えにかかって、何人かが宙に舞っていたのは突っ込むべきなんでしょうか？

・・・陰で私を睨んでいた（「私の方が可愛いんだから！」）、熱っぽい視線を向けていた人（「やらないか？」）は無視します。

あれはダメです。冗談じゃなく、絶対越えちゃいけない一線超えた人たちですよ。マジで。

いかん、また寒気が・・・

これからしばらく住む場所なのに、気が休まらないとはどういうこ

とでしょうか!?

部屋に戻ってしばらくしよーくと荷解きの続きをしたり、話したりしていると、しよーくんの夜のお仕事時間になったようです。

「じゃ、そろそろ行ってくる。おっと、やっぱり緋音も来ないか？ 言い忘れてたけど、学園長と一緒に来いって言ってるみたいでさ。」

嫌です。前にも言ったように魔法生徒にはなりませんよ。

それに、その集会に行ったら、私が何を言おうが、魔法生徒扱い確定でしょう？

「まあな。」

そう苦笑いして、しよーくんは出掛けて行きました。頑張っ下さいね。

さて、私もしなければいけないことをするとうしよう。

まずはどんなトラップを張るかですね。精霊さんにもお願いしよう。

ああ、お母さん。あなたの心配は的中しました・・・

いつの間にか荷物に入っていた痴漢撃退セットは有効活用させていただきます。

そして、お父さん。 家に帰ったら殴らせてください・・・

あなたの言葉はシャレになりませんでした。

翌日の朝、しよーくんは大きな怪我もなく帰ってきたようで、すやすやと眠っていて安心しました。

食材を買って置くのを忘れていたので、今日は近くのコンビニにでもよって買い物することにしました。

そうと決まれば、しよーくんを起こして早めに出掛けるとしましゅー！

しよーくん、起きてください。 朝ですよー！

「ん・・・あ、ああ？ 緋音か・・・ おはよう。」

おはようございます。 しよーくん顔を洗って着替えてください。
今日は早めに出ますよ。

「ん？ 何で？」

昨日食材を何も買わなかったからですよ。 コンビニにでもよって行きましょう？

「ああ、そうだったな。 帰りに買ってこないとな。 食材だけじゃなくて他のも。」

そうですね。 どこか安くていい所探しませんかね。

そうして、私たちは早めに登校しました。

登校中の雑談として、（周りに人が少ないため）昨夜の集まりについて聞いていました。

最初のお仕事はどうでした？ 鬼退治でもしましたか？

ありゃ、顔合わせと軽い手合せただけですか。 ちなみに、誰と？

へー、高校生の先輩とですか。 金髪美人の影使いで、何か派手で正義正義うるさいんですか？

あらら、それはしょーくと相性悪そうですね。 性格的な意味で。

適当なところで負けたんですか？ 強かったんですね？ 全力でもよかったのでは？

ああ、そうですね。 しょーにも使われないように言われてますし、

後が面倒そうですね。

しよーくんもししよーもそこらへん割と適当ですよ？

あら？ 私の影響もあるんですか？ そりゃ失礼。

へ？ 学園長が放課後に来いつて？

無視ししちゃ・・・ダメですよ。

絶対厄介事ですよ？ 憂鬱です・・・

あ、コンビニ発見！ 何食べましょうか？

授業は、テンションが高くなりすぎたり、不真面目な生徒を手際よく鎮圧することで着々と進みました。

それぞれの先生が手馴れた感じで対処していたのが印象的でした。

そして放課後、私は多くの女子中学生にジロジロ見られながら、一人で学園長室へと向かっています。

しよーくんも道連れにしようとしたましたが、買い物してくると言って逃げられました。

逃げ切られる前に買い物追加メモ（トラバサミ、警報装置など）は何とか渡せました。

憂鬱になった私の様子をみて声をかけてきた男子の質問に答えると、

「うわ、そりや勘弁！」「俺でよければついていこうか？」「いや、俺が！」「俺に任せろ！」「それより、女装をした方が・・・」「白峰の女装！？」「いいね！」「カメラは任せろ。」「いや、シャレにならんだろう。」

まともな意見が少ないですね・・・

とりあえず、その場はお礼を言つて一人でここまで来たんですが、女装を推した人、あなたの意見を採用した方がよかったかもしれない。

キツイです。昔来たときはししょー（主に視線が向けられていた）がいましたし、私も子供でしたからね。

「あんな子いたっけ？」「キレー」「あれ？でも男子の服着てるね？」「ホントだ！・・・どっち？」「どこかで見たような？」「ああ、あの子か。」「何でいるんだろ？」

とかここでも聞こえてきますね。

まあ、私も派手な部類ですし、麻帆良の中でも中々いないタイプですからね。

なかには私に注意しにきた子もいて、学園長に用があることを告げると納得していただいたんですが、

「ちょっと、あんた男(？)よね？　ここは女子中よ！　帰りなさいよ！」

ここまで攻撃的な人はいなかったなあ……

思わずため息をつきたくなった私の背後から、活発そうな声を荒げて誰かが近づいてきました。

「その傘差してるあんたよ！　聞いてんの！？」

ああ、すみまっつて、うわ！

か、傘はとらないで！　引っ張らないで！

今日(めっちゃ晴れ)はマズ、ダムちょっ、離してー！

私が抵抗したためか、向こうも意地になって傘をより強く掴み、ちょっとした騒ぎになりました。

相手と一緒にいたらしい女の子と、たまたま通りがかった元クラスメイトの子達が駆け寄って間に入ってくれなかったら、混乱涙目状態の私と熱くなった彼女の間で傘の綱引きがまだ続いていたでしょ

う。

本当にありがとうございました。

「う、ごめんなさい！」

「ごめんな。アスナあわてんぼやから。」

いえいえ、怪しい人を警戒するのは仕方がないと思いますよ？

手加減してほしかったですけど・・・

「うつ！ わ、悪かったわよ・・・」

バツが悪そうに謝るのは赤い髪をツインテールにしたオッドアイの女の子で、隣にいる女の子は黒髪でポワポワした感じの女の子です。

うん、目の保養になりますね！ ラッキーかな？

「ここに男の子おらんからなあ。それに・・・」

ああ、言われずともわかっています。

私は体が弱くてですね、日に当たれないんですよ。

「どこか悪いん？」

体質ですね。私、アルビノなんです。

「あるびの？」

「アスナ・・・」

ふふ、私はメラニンが作れない体なので・・・そうですね、簡単に言えば日に当たると病気になるやすいんですよ。

だから、こうしてサングラスや日傘で守ってるんです。ああ、そんな落ち込まないで！ 悲しまないで！

・・・こほん。まあ、気にしないで下さい。

「でも・・・」

そこまでは。すみませんが、用事がありますので失礼します。

気にしないでくださいねー！

後ろでまだ何か言っているようですが、ああいうのはこっちが話を切った方が早いです。

いつまでも学園長を待たせるのも悪いですし、何だか攻撃的な視線がどこからか刺さってきます。

即、この場から逃げるに限ります！

もうこれ以上のトラブルはごめんです！ フリじゃありませんよ！？

第十二話（後書き）

ありがとうございました。

第十四話（前書き）

すみません。描写を増やそうとは思っていましたが、会話を書くのが面白くて会話中心になりました。

会話を書いてたら切るのがもったいなくなっただるだる後回しになった上に量が書けませんでした。

やはり駄文作家なのかな。

第十四話

途中、何人かの先生に呼び止められましたが、学園長に、と言いかけてだけで納得されたのは信用されているからなんでしょうね。

無論、悪い方ですが。

頻繁に来ていないのに、忘れないですんなりたどり着いたのは、やはりあの学園長のインパクトが強いからなんでしょうね。

先程の出来事の後なので、もうこれ以上は厄介なことにならないとうれしいな……（↑諦めてる）

さて、相手が学園長だとしても礼儀は必要なので、来訪を知らせます。（文法が変ですがきにしません。）

麻帆良男子中学校一年生の白峰です。 学園長はいらっしゃいますか？

「入って構わんよ。」

返事が返ってきたので、私は覚悟を決めて入室します。

失礼します。 今日はどうなご用件で呼ばれたのでしょうか？

学園長の近くには（デスメガネと恐れられ、麻帆良？2の実力者だとか言われている）高畑先生が立っていました。

ああ、早くも後悔しそうです。 いや、たまたま居合わせただけかもしれません！

「ほっほっほ、今日来てもらったのは昨日の夜の会合についてなんじゃが・・・」

あれ？ もしかして脅し要員ですか？ 場の空気がピリピリします。

「なぜ来なかったのかね？」

上から目線ですか、この野郎。

私はあなたにどのように認識されているんですかね！

聞いたらこの中学校ぶっ飛びそうですね。 落ち着け、私は大人ですよ・・・よし！

私は魔法生徒でもありませんし、体が弱いんで無理して行く必要を感じなかったからです。

問題がありましたでしょうか？（笑顔です。 それはもうにこやかに！）

「ふむ、確かに。 じゃが、君も魔法に関わる身じゃ、魔法関係者に知らせておくのは悪いことではなかるう？」

関係者の皆様と会ってまで知らせる必要はないのではありませんか？

私のことは森里先生が見てくれますし、私のように魔法があることを知っている人は他にもいると思いますが？

「確かに魔法関係者以外にも知っておる者はおるが、お主は魔法を使う側じゃろ。 それに、精霊に・・・」

学園長。

何がおっしゃりたいんでしょうか？ （我慢、我慢です！）

「正式に魔法生・・・」

いやです。

・・・おっと、一瞬静かになりましたね。

威圧された、ピリピリした空気も緩くなりましたね。

「ダメかのう？」

気持ち悪いです。

何ぶりっ子ぶってほざきますかこのぬらりひょん。

前々から断っている内容じゃないですか、全く時間を取らせておいてそれですか？

何度も無理だつていつてるのにしつこいですね。 だから来たくなかったのに・・・

よし、帰りましょう。

隠れてる誰かさんもいますしね。

なにせ中学生の制服を着た金髪少女ですからね。

さわらぬ神に何とやらゝってね。

それじゃあ、失礼しますね。

「待ってくれないか。」

高畑先生、何でしょうか？

ポケットに手を入れて、戦闘でもするんですか？

「そうじゃないよ。ただ、何故魔法生徒になってくれないのかと思ってる。」

学園長めがろじひょうから聞いてませんか？

私は争い事が嫌いですし、体が弱いので戦闘なんてとても無理ですよ。

魔法を習って、どんどん使って、強くなりたいんだーとか思いませんし。

それでも、正義のために戦えー、とか言うんですか？

「友達を守ろうとは思わないのかい？」

餅は餅屋って言うじゃないですか。

それに、手が届く範囲で私にできることは勝手にしますし。

そうだ、昔から言いたかったことあるんですけど、いい機会ですし、言ってもいいですか？

「・・・何かな？」

何も知らない人たちを勝手に巻き込んで正義面するな、反吐がでる。

きゃー、言っちゃいました！

すつきりしますね！

それでは怖い人たちが睨んでいるので早く帰りましょう。

それじゃあ、失礼しました。

ああ、千雨ちゃんに会いたいな。

抱きついたら・・・ぶん殴られますね。

ひゃー、それにしても麻帆良Top3が勢ぞろいですか。

怖い怖い。

一人は吸血鬼、一人は英雄、一人は妖怪、ってまともな人がいませんね。

ああいった人たちに狙われたら、どうしましょ？

さすがに人間やめるともう絶対に魔法から離れられませんしね。

適度に精霊さん達にからかってもらって逃げるに限りますね！

ま、それも逃げられるなら、ですが・・・

私が寮に帰り、部屋についた時にはもう空は暗くなってしまいました。

しよーくんには一人で買い物させてしまったので申し訳ないですね。

ただいまー！

「おかえり。食材とか適当に買ったぞ？ それと、お前の追加メモは破り捨てたから。」

酷いですね！？ あれ、結構本気で欲しかったんですが！

私の精神・肉体の安全を守るには必要なですよ！

「あんなもんあるわけねーだろ！ 欲しけりゃ専門店で買え！」

む、こうなれば千雨ちゃんにお願いしてみよう！

「千雨に？ ああ、あいつパソコン持ってるんだっとな。」

そうですよ。さすがにパソコンは持ってませんからね。

以前千雨ちゃんのパソコン見せてもらったら、私のコスプレ写真が大量に保存されててびっくりしたんですね・・・

「俺も見せてもらったぜ。なかなかよく取れてたよな。」

はいはい、もうそれぐらいじゃ怒りませんよ。

それに今日はもう疲れました。あゝ、癒しが欲しい。

「（パチン！）昨日のことか？魔法生徒になれとか？」

どっちもです。

学園長室に入ったら妖怪一人と英雄一人がいて・・・

「（妖怪↓学園長、英雄↓高畑先生？）よく何もなかったな？」

ロリっ子吸血鬼が隠れてて・・・

「（ロリっ子吸血鬼↓！？）え？もしかして闇の福音！？」

話聞いてたらむかついたんで、正義面すんな！って言って帰りました。

「お前何してんのー！？」

しよーくん、近所迷惑ですよ？

「とつくに防音の結界はかけてる！ それよりも、お前が厄介事の種蒔いてきてるじゃねえか！」

そつだ、今度は千雨ちゃんも誘って一緒にあそびましょ？

「話聞けよ。」

ああ、楽しみです。ね。 とりあえず、夕食でも作りましよう。 何でもいいですね？

「何でもいいけど・・・ああ、現実逃避してんのか。 かわいそうに。」

お料理もたーのしいーなー。

翌日、千雨ちゃんに携帯で連絡し、放課後に出掛けることにしました。

私たちが千雨ちゃんを迎えに行き、どこかでデザートまたは甘味を食べにいきます。

しょーくんは渋っていましたが、すがってお願いしたら（周りの男子に睨まれて）快諾してくれました。

いやー、持つべきものは心友ですね！

「お前は死んだら地獄だろうな。」

私は天国ですよ？

そんな嫌味言つてないで、千雨ちゃんを驚かせに、もとい迎えに行きましょう！

「千雨もかわいそうに、明日からかわれるんじゃないか？」

怒った千雨ちゃんもかわいいですからね！それに久しぶりですね。

「ああ、いつの間にか付き合いが悪くなることがあったな？あの図書館島トリオと遊んでたのか？」

それもあつたでしょうけど、趣味ができたんじゃないですか？コスプレとか？

「コスプレえ？千雨が？」

何ですかその態度。千雨ちゃんかわいいじゃないですか！

「それは認めるがな・・・」

私にコスプレさせる衣装を持つてくることもありましたが、私の両

親と裏で取引したり、ハルナちゃんと妙に馬が合うときとかありましたから、きつとそうだと思いますよ。

「お前はよく見てるな。　　やっぱ千雨が好きなのか？　それとも宮崎か？」

ああ、恋バナですか？　私はみんなそれぞれ好きですよ。

しょーくんは？　結構モテましたよね？

「いや、確かに何人がそういうのはいたが・・・っておい、お前の話だよ。」

あ、千雨ちゃん発見！　のどかちゃんたちもいますよ。

「ちっ！　時間切れか。」

全く、しょーくんは長い付き合いのせいかどこか勘が鋭いです。

私のこの性格が仮面みたいなのになうすうす気付いてるでしょうね。

ま、私が目覚めた時から外見に合わせて気を使ってきましたし、いまさら素（前の世界の私の性格）の付き合いなんてできません。

それが原因なのか、魂と肉体が噛み合わないのか、妙なズレがありますし・・・

未だに夢の中で生きているかのように感じている私に、恋愛とか無理です。

しょーくん。

「ん？」

ありがとうございます。 私と一緒にいてくれて。

「気にすんな心友なんだろう？」

はい。

こういう奴が友達になったから、この現実（夢）も悪くないと思えるんですよ。

・・・ま、今から目を背けるのは一旦ここまでにしましょう。

そんな心友に一つ聞きたいんですが？

「なんだ？ 恋バナの続きか？ 周りの視線か？ 千雨が怒ったか？」

いや、そうじゃなくてですね？

警戒というよりも、攻撃的な視線を感じるんですが？

「俺らが？」

私だけが。

「知らん。周りの誰かの嫉妬か？ お前のお友達（精霊たち）に探してもらえよ。」

あんまり日常で頼るのは好きじゃないんです！。

それに嫉妬って、私が綺麗といたいんですか？ それとも自分がカッコいいって言いたいんですか？

どちらにしろ私が女扱いなんですね、我が心友？

とりあえず原因が分らないと千雨ちゃんたちと合流する、の、わ
ー！

「なんだ？ 気でも狂ったか？」

何でそんなに冷たいんですか！

「こんなところに（女子中の近く）来たせいで周りの視線が痛いんだよ！」

すみませんでした！ いや、違います、思い出しました。

「何を？」

いや、この視線ですよ。

昨日学園長室に行く途中でオッドアイのツインテールの子と黒髪の大和撫子的な子と話していたら、こういう視線がどこから刺さってきたんです。

あ、ついでに機械的な視線と面白いモノを見るような視線、怒りの視線も追加されました。

「お前はそんな細かい視線の違いがわかるのか。人間視線探知機め。」

褒め言葉ですか、ありがとうございます。

私はしょーくんから視線を外し、先ほど千雨ちゃんたちを見かけた階段の方向を向きます。

階段中ほどに、怒っている様子の千雨ちゃんや戸惑ってる感じのどこちゃん、煽ってるハルナちゃんと夕映ちゃんがいますね。

あ、やっぱり千雨ちゃんだ。

「本当だな。．．．ついでに緑髪ロボットと金髪少女も遠くにいるな。」

はい。

「逃げるか？」

逃げましょう。

さすがに走って逃げられなかったので千雨ちゃんに追いつかれ、怒られている間にのどかちゃんたちもやって来て、しょーくんと話しています。

「聞いてんのか！」

はい！ 聞いてます！

あれ？ デジャヴ？

第十四話（後書き）

ありがとうございました。

第十五話（前書き）

とりあえず続きを書いてみました。

第十五話

千雨ちゃんを驚かせに行ったはずが、逆にひどい目にあっている緋音です。

多くの女の子が帰宅しようとする中、千雨ちゃんに捕まった私たちは近くの影に引っ張られ、何故ここにいるかを話すとお説教（地面に正座）が始まりました。

「恥ずかしいことするな!」「朝倉に見つかったらどうしてくれるんだ!?」「翔もちゃんと止めるよ!」「いいわけすんじゃねえ!」「といった言葉を私としょーくんは時々肉体言語交じりで頂きました。

でも、何気に私を気遣って影に連れてきた千雨ちゃんはやさしいですね。

ツンデレ?

「ツンデレじゃねえー!」 バチーン!

へぶっ・・・!

ち、千雨ちゃん、落ち着きましよう!?

いくらここが陰になっているからって、他の人たちにも聞こえますよ!?

「お前の悲鳴が?」

何怖いこと言ってるんですか!?!　しょーくんも千雨ちゃんを止めてくださいよ!

・・・って、あれ?　俯いて肩震わせてますね?

千雨ちゃん、どうかしましたか?

「(ボソツ) 久々に会えると思って楽しみにしてたのに・・・」

ん?　千雨ちゃん、今なんて言いましたか?

あれ?　しょーくん、なんで静かに素早く私たちから離れるんですか?

自業自得?　地獄に落ちろ?

いや、だから私は天g・・・

「馬鹿ー！！」 バッチーン！！

・・・・・・・・！！？

・・・グーじゃなくてパーだったのが千雨ちゃんなりの優しさだったと思うことにします。

それと、後ろの心友。 黙祷するな。

そんな私たちの騒ぎを聞きつけたのか、のどかちゃん、ハルナちゃん、夕映ちゃんの三人が私たちと合流しました。

赤く頬を腫らして意識のない私とそんな私をため息交じりに介抱するしょーくん、涙目で二人を睨んだり心配したりする千雨ちゃんはさぞ奇妙な組み合わせだったことでしょう。

教室では、千雨ちゃんがどこか嬉しそうにしていたのを、ハルナちゃんがかかったりしていたそうですが、実際に会えば修羅場（？）

が発生していたんですから……

のどかちゃんは「え？ え？」と狼狽え、夕映ちゃんは「何やつて
るですか……」と呆れ、ハルナちゃんは「ネタ来たー！！」とい
って常備している紙とペンで何かを描き始めます。

ちなみに、ある男の娘（ヒロイン扱い）を巡って二人の幼馴染（両
方男）が争い男の娘が倒れてしまうBADENDの話らしいです。

しばらくの間混沌とした空間が形成されるも、私が目を覚ましたこ
とで終わりを迎えました。

ん……あれ？ 私は……

「緋音！」

「おお、大丈夫か？ お前ちょっと気を失ってたぞ？」

え……っと、どうしたんですたっけ？

「緋音、ごめん。」

さすがに、千雨ちゃんもやりすぎたと思ったたらしく謝ってくれまし
たが、私はよく覚えてません、ということにします。

んゝ．．．しょーくん、何かありましたっけ？

「さあな。」

「さあなつて、私ゝ．．．」

まあ、特に問題もなさそうですし、時間ももったいないですから出掛けましょう、ね？

「そうだな。早くしねえと人気のある店とかもう満員なんじゃないか？」

「．．．わかった。」

よし、しょーくんも上手に乗ってくれましたね。

さすが、我が心友。

千雨ちゃんもなんとか納得してくれたみたいです。

．．．代わりにしょーくんが何やら睨まれていますね？
↑通じ合
つてる二人を羨ましがっている

さて、後から来た図書館島トリオ（命名：しょーくん）の方を向けば．．．

のどかちゃんに夕映ちゃんが言い（「やっぱり翔が緋音の最後の難関です！」、「のどか、ファイト！」）、のどかちゃんは顔を赤くし

てオドオドアワアワしており、ハルナちゃんは手のスピードと妄想がされに加速して暴走しています。

見なかったことに・・・したいなあ・・・

しかし、友達ですし、放っておくわけにはいきません。

そして、下校中の何人かがこっちを気にして見ではすぐに目を逸らして帰っていくのを見てしまいました。

思わず、視線をしょーくと千雨ちゃんに向けると、千雨ちゃんがしょーくんの襟を掴んで前後に揺さぶっていました。（翔がさつきのお返しに千雨をからかう ↓ 千雨がキレる）

・・・私も、帰ってもいいかな？

私たちは今女子の間で人気の喫茶店『翡翠』に来ています。

明るく楽しいひと時を演出しているこのお店にはオープンテラスもあり、ケーキ類の販売も行っています。

どうやら年齢不詳のマスターとパティシエさんの夫婦が営んでいるらしく、二人の見た目は二十代の美男美女なのに、大学生の娘さん（こちらモクール系の美人らしい）がいるようです。

ここの名物はコーヒーとシュークリームらしいですが、紅茶や他のケーキ類、軽食も妥協はないようで、学生を中心に連日大賑わいだそうです。

店員さんも男女ともに容姿・実力共にハイレベルの人材ばかりらしく、そちらが目当ての常連客も決して少なくはないとか……

私はオリジナルブレンドのコーヒー（ブラック）と季節限定のケーキを選びました。

限定ってつくとも性に欲しくなりますよね？

運ばれてきたのは苺のタルト。赤く瑞々しい苺が白く化粧を施され、カスタードと生クリームが苺と苺のビューレの酸味を和らげ、サクサクのビスケット生地と一緒に口の中で甘く溶けていきます。

そして、コーヒーを一口。苦味のなかに仄かに酸味と甘味がある計算されたおいしさが舌に余韻を残し、鼻腔を通して頭へと昇っていく挽かれたての豆のいい薫が私を落ち着かせます。

ふう・・・落ち着きました。

帰りたい！

「俺の方が帰りたいわ！」

しょーくん、小さく怒鳴るなんてなかなか器用ですね。

でも、明らかに私たちに視線が集まっていますよね？ 居心地悪いんですよねえ。 ケーキとコーヒーは美味しいですけど・・・

「お前は珍しい格好だが、服を除けばいつものように女に見られるだけだろうが！ 俺は複数の女の子たちとデートするハーレム野郎に見られてんだよ！ 確かにケーキとコーヒーは美味しいけど・・・」

しょーくんの指した方向を見れば、何人かの男性客がしょーくんを睨んでいます。（「リア充爆発しろ」「モゲロ」「くそ！ 何であんな奴が！ あ、ウイトレスさん。 今度デートしません？」「（ガシツ！）てめえ、表出るや！！」「」）

少し騒がしくなって人数は減ったものの、やはり視線が私たち（実際は緋音と翔）の方に集まっています。

遠くからジーツと見る人もいれば、近くでチラチラ見てくる人もいます。

女の人小さくキャーキャー騒いでる気もしますね。

やっぱり美少女が4人とカッコイイ男の子が集まっているから目立つんでしょうか？

「さりげなく他の人に責任を擦り付けたな？」

他に理由がありますか？

「ほう・・・俺にはかわいい女の子4人と、何故か男の制服を着たサングラスがアクセントになっている美人がいるように見えるがね？」

へへ、そんなグループがいるんですか？

「俺らの話だろうが。他に似たようなの探すなよ。失礼な奴だな。」

・ いいじゃないですか、少しぐらい現実から目を逸らしても・・・

「俺たちが戦うべきは現実だ。」

顔を近づけ話し合っていた私たちでしたが、ケーキの食べ比べやお話に夢中だった女の子たちが気づきます。

千雨ちゃんが呆れ（またか・・・）、のどかちゃんが顔を赤くして慌てだし（あわわわわ、どうしよう！？）、夕映ちゃんも顔を赤くしつつ何かを確信し（やはり！）、ハルナちゃんがスケッチし始めます（喫茶店でのBLネタの見本―！）。

もちろんいつもの反応ですね。

でも、ハルナちゃんの反応で何となく分かりました。

（いつも通り目立つ私）＋（ハーレム野郎 翔？）＋（男装？ いや、男の娘！？）＋（BL：男の娘×男の子）＝店内の関心二人占め

こんな感じですかね？

まさか私としょーくんでBLと見られるようになるとは……………

今までだったら私の女の子扱いだけで済んだんですけどねえ？

↑

制服が無く、ほとんど男とばれなかったから

とりあえずは……………身内の問題から処理しましょう。

ハルナちゃん、ネタに使うなら使用料を請求します。

その後は、私もケーキの食べ比べに参加しては女の子二人ほど赤面させて一人に殴られ、しょーくんに「あぐん」を試してみたら周りの人もすごい食いついてきて止めるに止められなかったり、夕映ちゃんを中心に図書館探検部の活動を聞いたり、楽しく過ごしました。

そろそろ帰ろうかという話になり、席を立ちます。

もちろん男が払うこととなりました。

「あ、あの、いいの？」

「そうですよ。自分の分くらい払います。」

まあ、友達同士ですからそれでもいいかもしれませんが、久しぶりにこうして集まりましたし……

「男の甲斐性とも思っておいてくれ。」

「あっはっは、男の子も恰好つきたい時があるんだよね。」

「そっいうことにしといてくれ。」

だから皆は先に外で待っていてくれていいですよ？

私たちがそう言って納得してもらいます。

それから店を出て、私たちが女子寮の近くまで送ることにしました。大丈夫だと断られましたが、もう暗くなってきたし、暖かくなってきたから変質者がでるかも、と言ってついていきます。

結局、のどかちゃんを怯えさせてしまったこと以外は問題ありませんでした。

夕映ちゃんやハルナちゃんに慰めると言われて頭を撫でながら慰めていたら、千雨ちゃんにキレられましたが、問題ではありません。いつものことです。

皆さん、今日は付き合ってくれてありがとうございました。

しよーくんは悪いですが、もう少しお付き合いお願いしますね？

「気にすんな。一応、覚悟してたぜ。心友。」

気にしますよ。でも、頼りにしますね。心友。

・・・さて、何の用ですか？

吸血鬼。

第十五話（後書き）

ありがとうございました。

第十六話

その日の空を覆う雲はなく、闇の広がる暗い夜を天上の満月と星々が彩り、地上を仄かに明るく照らす。

立ち並ぶ桜から花びらが風を受けて舞い散り、月の光を浴びて妖しくも美しく、人を魅せる。

風情を感じる大人であつたならば桜の下へと赴き、酒を交えて鑑賞し、酒とこの光景に酔い、あるいは飲まれただろうが、今は無粋な音や不思議な現象が演出する幻想的な舞台となっている。

氷の矢が炎の矢が氷塊が猛る火炎がぶつかりあい、壊れ、散り、燃やし、凍らせ、照らし、輝く。

人と鬼が己が肉体と業を用いて駆け、翔け、殴り、蹴り、投げ、縛ろうとする。

封印されて力が弱まっていようと、人々に恐れられた名と生きてきた年月は伊達ではなく、吸血鬼である金髪の幼い女の子がその綺麗な顔を愉悦に歪ませながら、一人の黒髪の男の子を追いつめる。

舞台から外れた所では、吸血鬼の従者然とした緑髪の絡繰り人形が主人の命により、白髪の女の子に見える男の子を抑えており、その叫びも抵抗も通じない。

何時までも続くのかと思われるこの闘争にももちろん終わりがあり、

どちらかが、もしくは両者が倒れるまで続けられる。

無駄だと悟り、抵抗を諦めた白髪の子は静かに男の子の無事を祈りながら終わりを待つ。

男の子が勝てば喜劇となり、女の子が勝てば悲劇となるだろう。

そして、この一夜限りの即興劇が終わる。

遠くまで響く破壊の音と炎と氷の争いが治まったのだ。

月光に輝く金髪を風になびかせる女の子は地に足をつけて立っており、黒髪を赤黒い何かで固められた男の子は地に力なく倒れ伏せている。

人間は吸血鬼に敗れた。

己の血で染められた男の子は死んでおらず、命に関わるほどの傷ではないものの、それなりに深い傷があり、体の一部に穴が空いているので、放置しては危険な状態となるだろう。

戦闘が終わったのを境に、もう捕まえておく必要もないだろうと自己判断した従者は白髪の子を放すと、その子は倒れた男の子の元へと走り、傷を拙いながらに手当し、意識を呼び覚まそうとする。

勝者の吸血鬼は後ろに従者を従わせ、そのやり取りを見ていたが、それに飽きたのか、吸血鬼は鼻を鳴らして白髪の子を引きはがし、糸で縛りあげる。

苦しむ様子も意に介さず、期待外れなものを、詰まらないものをみるかのように観察していた吸血鬼だが、自分の本能が刺激されるのを感じた。

血が欲しい。

そいつの白く柔らかそうな血肉を己が牙で噛み、貫き、侵し、食らい尽くせ、と吸血鬼の本能が叫ぶ。

抗えず、抗うつもりもないため、死なない程度なら問題ないと自己完結した吸血鬼は、縛られた生餌に近づき、そののどへと顔を寄せる。

そして……………

・・・まあ、そんなことはありませんでしたが。

「何だこれは！？ 魔法が使えんだと？ 茶々丸、脱出できるか！？」

「すみません、マスター。拘束を解除できません。」

「うわゝ、お前もなかなか酷いな。女の子に優しくする紳士（笑）じゃなかったのか？」

うるさいですよ。

いきなり、「ほう、私に気付くとは優秀ではないか。」「茶々丸、遊んでやるぞ。」「お前の力をみせる！」とか訳のわからないこと言って襲ってきたんですからこれぐらいいいじゃないですか。

どうせ、学園長の話聞いて興味を持たれたんでしょうが・・・

「いや、そうだけどさ・・・落とし穴に落とさなくてもいいんじゃないか？ 抵抗できなくするだけでいいだろ？」

「そうだ！ 貴様、よくもこの私——闇の福音をこんな目に合わせてくれたな！？ この恨みは必ず晴らさせてもらうぞ！」

そんな所で吠えても怖くありませんよ、マクダウエルちゃん？

「何だとー！？」

「マスター・・・」

さて、千雨ちゃんたちを女子寮に送った私たちでしたが、誰かの観察している視線を感じた私（しょーくん命名：人間視線探知機）が、精霊さんに頼んでリンクを繋ぎ、隠れて様子を見ていた例の吸血鬼主従を発見しました。

しょーくんと思いを示し合わせて相手を呼んでみれば、すぐに相手は姿を現しました。

どうやらあの学園長室で見られた時に興味を持たれたらしく、学校帰りに私たちが騒いでいるのを見かけ、今夜はたまたま満月だったこともあって、私を見極めようとしたらしいです。

彼女については、麻帆良に封印されてるとか、今は力が弱まってるとか、それでも600年生きた強さは本物だとか、私の特異さに気付く可能性の高い相手だとか、色々森里先生としょーくんから聞いていたので、これまで一応気を付けていましたが、実際この目で見た感じではあまり怖く見えなかったんですよ。

桜散る美しい月夜を背に舞い降りた金髪美少女はすごくキレイでした！

それで、つい気が緩んだところに（最強種であるという傲慢さや600年培った自分の力や技を信じての）上から目線の発言を聞いて

ついイラッとしちゃったんですね。

学園長たちのこと思い出して。

だから、まずは飛び掛かってきた二人から精霊に離れてもらい、大抵の魔法が使えない空白地帯を形成して、相手の発動中・発動しそうな魔法を不発させました。

魔法が解除された上に使えないことに驚いている間に、相手の下に直径2〜3メートル、深さ3〜4メートルくらいの穴をつくってもらい、そこに地の精霊と風の精霊に引き込んで（押し込んで）もらって今に至ります。

ついでに、ロボットの方は岩（煉瓦とか、土とか）の枷をはめ、穴を掘った分の土とかは簡単な人型の土人形にして精霊さんに宿ってもらい、私たちを一応警護してもらっています。

万全を期すまで油断はしませんよ。　私は戦闘キャラみたいに丈夫じゃないんで！

「くそっ！　隣の奴より遥かに弱そうな素人にやられるとは・・・」

ふはははは、この精霊に満ちた世界で私を害そうなんて、甘いんですよ！

「貴様ー！　早くここから出してまともに戦え！　今度こそ氷漬け

にしてくれるわー!!」

はははは。

黙れ、ニンニク漬けにしてやろうか？

「ひいつ、ニンニク・・・!？」

「マスター・・・」

「くくくつ、どっちが悪役かわからねえな。」

何言ってるんですか？ 私はか弱い善良な一般人ですよ？

友達（精霊）が凄いで。

「その友達が世界レベルじゃねえか。」

ならしょーくんは宇宙レベルですね。心友ですし！

「おいおい、心友の称号が重いな。」

「落とし穴・・・ニンニク・・・うわ、ナギ、やめろー!!」

「あの、すみません。マスターにもう襲わないようにさせますので、ここから出してくれませんか？」

少し気を緩めた私たちが談笑していると、マクダウエルちゃん何かに怯えて叫び、状況を打開する方法がないのでしょうか、枷をつけられたというよりも埋まっていると表現した方がいいような状態の茶々丸ちゃんが助けを求めてきました。

主従というより親（茶々丸ちゃん）子（マクダウエルちゃん）ですね。

「茶々丸!？」

「マスター、言うとおりにしてください。」

「しか「マスター。」・・・わかった。」

ありや？ 単なるロボットかと思ったら中身はまるで人みたいです
ね？

まさか、主人を説教するとは・・・

完成度たけえーな、おい。

とりあえず、助けてあげるからその後暴れないように、と約束させます。

しょーくんは甘いと思ったようですが、私に危害を加えようとしても勝手に助かるだろうし、自分が間に入ればいいと判断したようです。

マクダウェルちゃんも悪の魔法使いの名に誓ってくれるそうなので、これまた精霊さんとしょーくんの手伝ってもらい、穴から出して元通りに直ってもらいました。

精霊の皆さん、ありがとうございました。

また何かあったら、すみませんをお願いします。

「白峰様、宮部様、助けていただきありがとうございます。そして、先程は大変失礼致しました。」

「ふん、いい気になるなよ？ 封印されてさえなければ・・・いや、さつきは一体何をした？ 爺が興味を持っているからどんなやつかと思えば、動きは素人のくせに・・・」

素人に負けた闇の福音・・・ぶっ！

「貴様——！」

「落ち着いてくれ、闇の福音。 緋音もからかうな。」

おっと、しょーくんありがとう。

全く、いくら認めたくない事実であろうと、現実を見なくちゃいけませんよ？

逆ギレですか？ 最近のキレやすい若者ですか？

ああ、永遠のロリータですもんね？

「何故か釈然とせんが・・・まあいい。 お前たちを私の家に招待しよう。 先程の詫びだ。」

そんなこと言っつて、どうせ根掘り葉掘り聞きだすんでしょ？

先ほどの言葉とその目が物語っていますよ。

さっきの仕返ししてやる的な雰囲気出てますし・・・・・・・・

ほら、また茶々丸ちゃんが呆れてますよ。

いや、明日はまた学校があるじゃないですか？

今日はもう夜遅いですし、お腹がすきました。 よって、早く帰ってご飯にしたいです。

しょーくんはどうですか？

「そうだな。 もう夜だし、俺今日は遅めのシフトなんだよ。 あ
と少ししたらお仕事だ。」

じゃあ、そこら辺で何か買って食べますか？

ということで、お断りしますね。

「ほう・・・私の招待を断るとはいい度胸だな？」

断っただけで！？

キレないで！ 構えも解いて！

ほらほら、大人（笑）の余裕で聞き流してください。

もう、お誘いは嬉しいですが、時と場合を考えてください。

結界、張ってなかったでしょ？

声を聞きつけて誰か来るんじゃないですか？

「ああ、そういうことが・・・」

「ん？ 闇の福音、人払いしなかったのか？」

「近くにいた何人かは暗示をかけてここを通らないようにさせた。
誰かが来れば茶々丸が教えるしな。」

「はい、こちらに誰かが来ればセンサーに反応がありますが、今の所誰も気づいていないようです。」

確かに人はいないんでしょうね。

でも、たぶん学園長はこの騒動を見てますね。

監視されてるみたいですし。

ま、わざわざ隠すほどでもない、かな？

・・・あれ？

監視を止めさせたのがまだ能力をちゃんと理解していなかったときだから・・・

あー・・・ちよつと手札を見せすぎたかな。

勝手に向こうで私の利用価値高めてるんでしょうし・・・

またしつこく勧誘されるかもしれませんね。

「？ どうした、緋音？ さっきから考え込んで。」

いや、学園長が一部始終を見てたならまた面倒になりそうだなあ、って。

「何？ 爺が監視していたのか？」

たぶんそうですね。

えーっと、目に魔力をちろつと流して、周りを見れば……

お、それらしいの（見た目は黒っぽい光の塊）発見！

どこかに繋がっていますし、術式的なもので補助されてますしね。

うーん、以前よりも隠密に特化させているようですね。

影？ いや闇、かな？

それに、精霊ではありませんが、噂に聞く式神っぽい感じがします。

丁度夜ですし、それに合わせた属性で組んだんですかね？

ま、私の魔眼は割と何でも（ただし、魔法関係で）見通せますから無意味ですね。

その気配すら感じられるようになってきた私に気付けない通りはない！

ただし、知識はないので理解はできません。

それも、その魔法を行使している精霊に聞けばどんなものか大雑把にはわかるから問題なしです！

思わずそんな解説まがいや感想を適当につらつら述べながら観察している（魔眼のことは口にしなかったようだが、それだけ言えばらしたも同然だろう）、学園長も私がたまたまではなく、気づいていることが分かったようで、魔法の行使をやめたようです。

いい歳して覗きとは相変わらずいい度胸ですね。

また、取引しまさ...

そんな思いがけない交渉ネタ（学園長用）を掴んだ私が、今後のことを考えていると、ドンッ！と誰かに襟を掴まれた勢いのあまり押し倒され、頭を地面にぶつけてしまいました。

気を抜いて考え事していた私に避けようがなく、普段明言しているように弱っちい私はその衝撃で意識が遠のきます。

最後に見聞きしたのは、綺麗な金色と必死な声、そして慌てた声と足音が二人分。

癒しを求めたはずなのに、怒られたり、（心と体に）ダメージを負ってばかりとは...

今日は厄日です。

↑ほとんど自業自得

第十六話（後書き）

ありがとうございました。

第十七話（前書き）

すみません。やりたいようにやったらかなり面倒な主人公になりました。

でも、こんな風にしたのは、「主人公は変だ。」を強調したかったのと、今までないようなキャラを作っていたらこうなりました。ちなみに、途中で作者も訳が分からなくなってきました。

この小説の主人公は面倒臭い。 ↑ 直す気なし

流し読みで大丈夫です。

どうせ、いつもの作者と主人公の暴走ですから・・・

第十七話

ああ、暗い。

そして、眩しい。

ここにはどこだ？ 上の方は白くて眩しく感じるが、下の方は黒く暗い。

自分の位置もわからず、本当はどちらが上でどちらが下なのかさえわからない。

ただ、眩しい方はたぶん表なんだろうな、となんとなく思う。

昔を思い出す。

この世界の私という存在ではなく、以前の元となった存在が過ぎしてきた日々が走馬灯のように次々と思い浮かんでは沈んでいく。

幼少時は、幼馴染と遊んでは喧嘩をしたり、時にはふざけすぎて痛い目にあった。

小学生になれば、いたずらやおふざけが好きで遊んでばかり、親に勉強しろと怒られ、習い事や塾を強制された。

中学生では、思春期の友達と一緒にエロ本で盛り上がったたり、部活で女の子にいいところ見せようと頑張り、遅い初恋の相手に告白して断られ、その日は友達に慰められた。

高校生になると、本気で部活に取り組み、勉強はいかに手を抜くかで盛り上がり、文化祭で好きな子を誘ってデートし、しばらく付き合ったりした。

中堅の大学に入れば、実家から離れて一人暮らしすることとなり、サークルに入って遊んだり、飲み会や先輩主催の合コンで飲みすぎて翌日も吐いたりしたし、新しくバイトを始めて金と出会いを求めたりした。

もう20歳だと感傷に浸りながら俺が寝て、三歳になった私が起きた。

そんな人生で俺は面白かったし、大きな失敗もなく、上手く過ごせたと思う。

澱に沈んでいた残滓が、今さらながらに表に浮かんでいく。

そして、同一であり、決して区別できない、二つの違う存在が対話を始める。

やつほゝ、私♪

よう、俺。

いやゝ、今までこんなことなかったのに・・・何ででしょうね？

知らないよ。俺がこんな漫画の主人公みたいな体験すると思わなかったしな。というか、頭ぶつただけで脳みそどころか精神まで掻き混ぜられるなんて、どれだけ存在が弱くなったんだ？

そりゃ、ぎりぎり人間の人類最弱レベルまででしょ？ どうせならもっといい場面（修行とか危機的状況）でこうなったら恰好つんですかね。これは夢でしょうか？

気絶してこの状況だし、こんな中二病みたいな現象は夢でいいだろ？

そうですね。ついでに、アルビノの男の娘で、精霊に好かれて、魔法使えて、人間であるものの不安定存在となった私も夢の中の存在でしょうか？

現実だと認めているよ。だからこそ俺は存在している。

あはははは、そうですねゝ。でも、別に前の世界の存在のままいてればよかったと思うときがありません？

無理。体も、精神も、環境も、関係も、時代も、世界も、全く違うのにいつまでも同じでいられるか。結局憑依したのか転生したのかすらはつきりわからんしな。

憑依でしょう？ 向こうとこっちの存在が混ざったからこそ、この私ができたんじゃないですか。 でないと材料が足りません。

そうだな、前の世界で形づくられた存在を解体してこの世界の真つ新たな存在と混ぜて創ってたらできたもんな、継ぎ接ぎだらけの完成品。

私なのに、いや、私だからこそ遠慮がありませんね、何者でもなくなつた残骸。

1（前の世界の自分）+1（この世界の自分）=1（完成品/残骸）
∴ 1（余りモノ）

過去（前の世界）の存在はほとんど澱に余つたモノとして沈んでいたな。

そりゃ新しい人生なんだから未来ある（この世界の）存在が私を創る主材料になるでしょ？ 影響は受けまくりましたが・・・

その結果がこれだもんな。 いや、自分を自覚できた時（三歳）の容姿と体質に合わせて悪ノリして作ったり、諦めたりしたからなあ・・・

やりすぎたましたね。 もう女の子じゃないですか。 これで男が好きになったら完全にアウトでしたね？

ははは、俺は男だからな。 女性が好きだよ。

愛せないくせに。

友愛はあるだろ？

言い訳ですね。まあ、過去（前の世界）の存在を完全に捨てれば恋愛もできたんでしょうね。

もう遥かに遅い。こうして俺は生まれ、形にしてしまったからな。せめて私の中の存在を疑似的に対話しているモノどうしで区別できたら違うでしょうが、

区別できない、矛盾を内包したからこそ俺だもんな。区別したら全部碎け散る。

全くよく成立したものです・・・ああ、これが「傑作」というものですね。ホント、なんでわかりやすく二重人格とかにならないのでしょうか？

いや、全ては「戯言」だ・・・結局、どこまでいっても俺は俺のままで、違いが自分では分かん。だが他者からすれば、いつもの俺は仮面（外面、建前）って判断されるだろうな。

完成品が仮面ね・・・やっぱり私は虚像ですか？

今を現実だと認めきれていないから、俺が本当はここにいない役割を演じているだけの幻だと思っただろ？ この世界が存在することを、この世界で生きていることを、皆を、家族を、心友を、俺を、しっかり認識して、信じる。

・・・さて、本題です。なんでさっきからこんな訳の分からない、意味のない、時間稼ぎのような自問自答してるんでしょうか？

そんなの決まってるだろ？ 一つは、俺が生まれる前の、それなりに上手くいっていた人生を思い出したからだ。

一つは、夢らしきモノの中とはいえ、偶々私がこうして自分の内面と向き合ったので、何となくですね。

一つは、現実逃避です（だ）。

・・・やっぱり外から聞こえますね？ 「緋音」とか「やめろ」とか「目を覚ませ」とか悲鳴とか破壊音とか・・・・・・・・

外から感じるよな？ 風が猛り、地が荒れ、水が弾け、火が噴きあがったりしてるのを・・・・・・・・

そういえば、周辺の精霊にお礼言っただ後も交感繋いだままでしたし、私の中の精霊も危害を加えようとしていたマクダウエルちゃんをまだ敵認識していたでしょうね。

ということは、いきなり俺が害されたと判断した精霊が怒ったり、慌てたり、混乱したり、悲しんでるってことかな？

ついでに共感した他の精霊も巻き込んで被害を増やしているんじゃないかな。

ああ。俺は精霊に好かれてるところか、親（または家族）というか家みたいになっていったもんな・・・

色々知りたくなかった事実ですよ。

とりあえず、夢から覚めないとな。

ええ、秘密は全部しゃべることになるでしょうが、こうなるとしかありません。

・・・あれ？ どうすりゃ起きれるんだ？

お約束として自分を殴・・・

「さっさと起きろ！ この馬鹿音ばかおとがー！！」

・・・！！？

目を覚ませば、天上に夜空を彩る満月と星々が目についた。

痛む左頬を手で押さえ、身体を少し起こして周りを確認すれば、目の前でボロボロの翔が肩で息をしており、森里先生や何人かの魔法先生や魔法生徒らしき人たちも控えていた。

何人かはどこかしら汚れていたり、焼けた跡があったり、びしょ濡れだったり、ボロボロで怪我をしている人もおり、疲弊しているようだ。

そして、地面は火で焼け焦げ、壁や岩塊が起立し、風が荒れ、水が溢れていたたり、植物も変な成長を遂げて動いていたりで、大きな地震が起こったかのようにめちゃくちゃだ。

多少は治まったのだろうか、まだ精霊が暴れて被害を拡大しているのが分かる。

急いで広範囲に交感をつなぎ、俺は無事であることを伝え、時間の精霊にここが荒れる前の記録を他の精霊に伝えてもらい、この環境をできるだけ元に戻してもらう。

それと同時に皆に複数の精霊による心身への癒しをお願いして、それが終われば解散して普段通りにしてもらおう伝え、俺は交感を閉じる。

とりあえず、それだけを済ませて息を吐く。

ああ、やっぱり大変なことになってしまった。

覚悟していても辛く思っていると、まだ完全に癒されていないが落ち着いた様子の翔が近づいてきた。

「はあ・・・はあ・・・。おい、目は覚めたか？」

「ああ、おはよう、翔。」

翔が何故か驚いた。

あれ？　なんで返事をしたら驚かれるんだ？

「緋音・・・だよな？」

「ん？　緋音以外の何に見えるんだ？」

「いや、口調とか、雰囲気とか・・・ああ、それがお前の素か？」

「あれ、何か変かな？　いつも通りなんだけど？」

うーん、今の俺はいつもと違うのか？

俺は白峰緋音で、最近中一になって、今日は厄日で、さっきまで夢

見てて、中二みたいな自問自答して・・・うん。

「ま、いいか。」

「いいのかよ・・・。（ボソツ）またこいつはさらに面倒なことを・・・あれか？俺が殴ったからか？」

自己完結すると、なぜか肩を落とされてしまった。

あ、サングラスが無い。日傘は・・・あった。でもボロボロだ。

サングラスは予備があつたけど、日傘は買わないとな・・・

そんなやり取りをしていると、周りが直され、癒されていくことに驚いていた魔法関係の人たちも落ち着きを取り戻したようだ。

どこかの誰かと話していた魔法先生たちの内、師匠がやって来て俺に話しかける。

「緋音、大丈夫かい？」

「はい、俺は大丈夫です。他の魔法関係者の皆さんも、大変ご迷惑をおかけしてしまい申し訳ございませんでした。」

師匠に答え、他の皆さんにも謝罪しておく。

何故かまたもや驚かれた。

何故？

「あ、緋音？ 本当に大丈夫なのか？」

「あゝ・・・師匠、たぶん緋音は正気ですよ？」

「だ、だが・・・」

「（たぶん）大丈夫です！ それよりも、緋音はこれからどうなるんですか？」

「そうですね。まずは、学園長に報告ですか？」

「・・・ああ、もう連絡はつけてある。今から学園長室に行くよ。」

そう言つて、師匠が他の先生に警備に戻ってもらつよう呼びかけ、俺たち師弟だけで学園長室へと向かおうとする。

「待つてください！ なぜ、その不審人物を拘束しないのですか？」

誰かが俺たちの足を止める。

振り向けば、金髪の高校生くらいの子が戦闘態勢で立っていた。

おお、美人だ。そして、破れた制服がセクシーだ。

もしかして、あの人が翔と手合せした人だろうか？

隣で箒をもった女の子が「お姉様〜！」と言っておろおろしており、黒人の先生も後ろに控え、俺を警戒している。

他の何人かの先生たちもその意見に賛成したり、俺を訝しんでいる。

あれ？　そういえば、マクダウエルは？

「高音君だよな？　ちよつと事情があつてね。この子は俺が預かつてる弟子みたいなものでね。不審人物でもないし、暴れることもないよ。」

「しかし、先程まで暴走していたではありませんか!？」

「お姉さん、すみません。先程のような暴走は起こさないようしていますので、先を急がせてくれませんか？　俺が言うのもなんですが、警備のお仕事もあるのではありませんか？」

このままではちが明かないと判断した俺は、頭を下げ、下手にてこの場を去ろうとする。

釈然とせんが、俺の責任となっているのだろうか・・・

「確かにその通りですが・・・わかりました。森里先生、しっかりその子を監視しておいて下さい!」

全然信用されてないようだが、何とか彼女の中で折り合いがついた
ようで制服を翻して持ち場へと戻っていく。

箒を持った女の子が慌てて追い、最後まで警戒していた黒人先生や、
他の魔法関係者の人たちもとりあえず持ち場へと戻ることにしたよ
うだ。

それを見た俺は師匠と翔に早く行こうと言って、学園長室に向かう。

ああ、今日は本当に厄日だ・・・

第十七話（後書き）

ありがとうございました。

第十八話

「それで、今度は一体どうしたのかね？」

俺たちが学園長室に入ると、そこには席に座る学園長とその隣に控えた高畑先生が目の前にいて、俺の後ろに翔と師匠が控えている。

他にも何人かの魔法関係者らしき人たちが報告や質問をしていたが、俺たちが入室したのをきっかけに、今は左右の壁側に控えている。

「森里君から聞いていた話では、もう精霊を暴走させることはないとのことじゃったが？」

この学園長、俺のことを魔法関係者に隠す気はもう全くないようだ。あれだけの騒ぎになったからには覚悟してたけど、この状況に直面すると萎えてきた。

どうやら魔法関係者全員に俺のことが知れ渡るんだろうな。

全部投げ出せたらいいのに・・・

「すみませんが、どなたか明かりを弱めてくれませんか？　俺はアルビノなので強い光を裸眼で見ると不味いんです。」

物珍しくみていた人たちの一部がその言葉で慌てて明かりを消し、室内を薄暗い程度にする。魔法も併用しているようだ。

「（はぁ・・・）学園長は途中まで見ていましたよね？ 俺と翔がマクダウエルの主従に襲われていたのを。」

「（あれ？ この子の雰囲気いつもと違うね？）む・・・今さら隠しても無駄かの。そうじゃ、お主がエヴァに襲われたのを返り討ちにし、何か話をしていたところまでは知っておる。君がこちらに気付いたようなので途中で監視はやめたがの。」

「そのすぐ後なんですが・・・翔？ 俺はマクダウエルに何されたんだ？」

監視の場に同席していたのか、高畑先生はマクダウエルが負けたことについて特に動揺したり、疑問を挿むこともしなかった。

だが、他の人たちはマクダウエルとの戦闘のことまで知らなかったようで、「闇の福音・・・」「あんな子が・・・」「どうやって・・・」と口に出して驚いている。

その中には、学園長にマクダウエルのことを危険だから排除しようと申し出る人もいる。

学園長と高畑先生がそれを宥め、流したりしているが、俺はそれを気に留めず後方へと向き、どうして俺が気絶したのかを翔に聞いた。

「覚えてないのか？ 闇の福音がブツブツ言いだしたと思ったら、お前に飛び掛かったんだよ。その勢いで頭から倒れてたな。その上、倒れたお前の上に馬乗りになって首を揺すられてたな。その度に頭を地面にぶついたりしてたんで、急いで引き離そうとしたら、あちこちで色々な魔法が発動してお前が起きた時のように被害がでたんだよ。」

ちなみに、闇の福音はその余波で吹き飛んで気絶し、一部を破損させながら茶々丸が助け出してどこかへ去って行ったそうだった。

ついでに、俺を起こすまでの十分くらいほとんど魔法が使えない状態で逃げ回ることになったと怒られた。

身体に異常はなさそうなので、どうやら寝ている間に精霊に癒されたようだな。

ざわついていた室内が静まり、俺への疑惑の視線が痛い。

とりあえず、今の話を聞いて思ったのは、

「・・・これって俺のせいですか？ むしろ俺は被害者側だと思うんですが？」

「「「き、貴様（君は）・・・！」「」」

「皆さん落ち着いて。」

「そうですね。話を最後まで聞きましょう。」

怖い怖い、もう騒動はお腹一杯なんで、静かに聞いておいてほしい。

「・・・確かにエヴァにも問題があったようじゃが、自分は悪くないとも言つのかね？」

あゝ・・・元凶が責任逃れしようとしているように見られてるな。

いや、そうでもあるけど・・・

「正直に言えば、そうです。俺は最初に頭をぶつけた時点で意識がなかったたので、自分の意志で暴れたものではありませんから。それと、普段生活したり魔法を使う分にはもう暴走させませんよ。そこら辺の制御は森里先生に監督してもらってしっかり身につけました。」

最初に返事をするとか威圧感が増したが、俺はそれに構わず言うだけ言ってしまう。

師匠にも再度確認を取った後は、学園長は黙ってこちらを見据え、何か考えているようだ。

今回の処罰についてだろうが、本当は魔法生徒として管理するついでに戦力として利用したいんだろうな。

さすがに俺も今回のことで諦めたから、どちらでもいいか・・・

誰かが意見を言う前にこっちの言い分を言ってしまう。

「えーっと、つまり、精霊からしたら敵認識していた奴が、いきなり家族みたいな俺を傷つけたので、感情が暴走したがあの結果です。ようは見境なく敵を排除しようとしたわけですが、精霊に人間的な倫理や道德の基準はありませんからね。局地的に突発的な自然災害が起こったようなものと思ってください。精霊に好かれているからこそこうなった上に、意識の無かった俺にはどうしようもありませんでしたよ。」

ここで納得して帰してくれれば一番いいんだけど・・・

「・・・ふむ、わかった。今回のことは不問にしよう。」

「」「学園長!?!?!」

「落ち着くのじゃ。彼の話を聞く限りどうしようもなかったようじやし、反省もしておる。現場の者たちの話では、怪我人の治療や建物の修復もしたようじや。一般人に被害が出ていたわけでもないようじやし、それでいいじやろう。」

納得できない人たちが抗議するも、学園長の言葉で渋々納得する。

静かに聞いていた人たちも妥当だと思ってくれたのか静かに頷いた

りした。

よし、これでいいだろう。

帰ろう（逃げよう）。

ここにいと・・・

「ところで白峰君。その力を学園の安全のために使わんかね？」

・・・やっぱりな。

以前の対応を思い出したであろう高畑先生が少し不機嫌そうになりながら学園長に「大丈夫なのか」と問うような視線を向けている。

後ろでは、俺や他の先生がどのような対応をするかわかっているからか、色々な感情のこもったため息が聞こえたりする。

他の先生方は「それはいい！」「彼なら一流の魔法使いになるでしょうね。」「本当に大丈夫ですか？」「森里先生もこのような生徒を隠していたとは・・・」などと絶賛したり、疑問を口にしたりで騒がしくなる。

勘違いが広がり、後ろの二人にも話が広がる中、俺は学園長を睨む。

「（やってくれたな、この妖怪爺が・・・。こうやって俺を魔法生徒として皆に認識させる気か。）」

「（ほっほっほ。ここまで優秀な子とは思っておらんかったし、ちよつといい機会じゃ。体が弱いとはいえ、魔法を覚えて訓練すれば一流の魔法使いにもなるじゃろうしの。）」

予想通り、俺に悪い状況になったが、俺はいつもの通り言うだけだ。いつもとは違って隠していた事も。

「学園長、それに対する俺の答えはいつもと変わりありません。お断ります。なぜそれほどまでに俺に執着しますか？」

それぞれ話を交わしていた人たちが沈黙し、「正義の」とか「学園の安全」とかいつて噛みついてきたり、訝しんだり、興味を持たれたりしたようだが、全てを無視して学園長を見据える。

「ほっほっほ、最近警備の人員が足りなくての。君のように魔法のことを知る優秀な生徒はなかなかいないのじゃ。今回のことで力は十分実戦で使えると判断できた。体が弱いというのは聞いておるが、森里先生に魔法を教えてもらって訓練すれば大丈夫じゃろ？」

「その訓練や戦闘に耐えられません。」

「・・・どういう意味じゃ？ やってみないとわからんじゃろ？」

頷く者もいれば、さらに訝しむ者もいる。

高畑先生は以前と違った答えを言う俺をおかしいとも思っているだ

ろう。

後ろでも翔が「緋音・・・？」と心配し、森里先生は静かに俺を見ている。

他人から見れば俺はそれなりに有能な素材だろうがな・・・

「学園長、俺が強いから、または強くなれるからと認識されているからこのような話を繰り返すんですよね？」

「・・・まあ、そうじゃの。」

「俺はね？ 弱いんですよ。力は精霊の借り物ですし、何よりも存在が脆いんです。」

皆は理解が追いつかない、できない。

「最近分かったことなんですが、俺は人間から外れそうなんですよ。精霊に好かれすぎたというか、相性が良すぎた弊害というか、おせっかいだね。」

ここで室内の全員に驚愕される。

偶々精霊に好かれた身体の弱い子だと聞き、どう見ても人間であるのにそう言われれば誰でも驚くだろう。

すまん、心友。　今まで黙ってて・・・ん？

後方と窓の向こうから何かの気配が増えてる？　ま、いいや。

学園長は長い眉毛の下の目を見開き、俺を真剣な目で見据える。

「俺の両親は人間なので、俺も元々はちゃんと人間として存在していたはずです。魔力に目覚めて精霊と結びつきが強くなったところからだと思っんですが、俺に纏わりついたり、宿ったり、恩恵を与えるだけでなく、存在が書き換えられていったんです。」

一部の俺を見る目が変わっていく、「化け物？」「何を馬鹿な！」「本当なのか？」「まさか精霊が・・・」といったところか・・・

「俺は成長の割に体が強くなかったり、女性らしい体に成長しすぎたりしたのを疑問に思っていました。日々精霊を知るために交感していると、もっと俺に知ってもらいたい、知りたい、近づきたい（・・・）、一緒になりたい（・・・）というようなことを考えているのがわかってきました。その時はただ仲良くなりたいだけかと思っていましたか・・・」

何人かは俺の容姿をジッと観察して、俺の言葉に納得している。

・・・俺の容姿を羨む女性の視線は無視する。

そして、精霊がそんなことをしたと思えず、俺を否定的な視線で見

ている人もいる。

ま、普段何気なく使役している精霊がこんなことするとは思わんだろっな。

「で、ある日聞いてみたんですよ。俺に何かしているのか、ってね。そしたら俺の人の部分を変えながら、魔に近づいていくような成長を促進されていたことがわかりましてね。精霊たちは強くなるから良かれと思ってしていたようですが、俺は人間のままにしといてもらえるように頼んだんです。」

「（まさか精霊が・・・）それで君は誰にもそのことを話さず、ただ体が弱いと言っていたのかね？」

「そういうことです。虫食い状態とでも思ってくれば分かりやすいですかね？ だから俺は存在が不安定で弱いんですよ。女の子の強めの一撃で意識が飛ぶくらいに。正直、いつ壊れてもおかしくなと思います。もう失った（変えられた）部分はどうしようもありませんので、ずっとこのままです。」

「・・・君が弱いことは分かった。それならば、治療は受けんかね？ 魔法的な治療ならよくなる可能性もあるじゃろっ。」

その言葉に首を縦に振り、同意する人が多くいた。

翔や師匠も賛成のようだ。

ああ、正義どうのこうの言う狂信者ばかりかと思えば、優しい人

も多いんだな・・・

思わず顔が笑みを形づくる。

「お気遣いはありがたいですが、遠慮します。」

俺の返答が意外だったのか、治療を勧めていた人たちはその口を閉じ、何故とでも言いたそうな顔をしている。

「俺は精霊と共にあります。治療は難しいでしょうし、この状態も俺が俺である証明みたいなものだと思って受け止めています。」

「君・・・」「しかし・・・!」「じゃが・・・」「緋音・・・」
「白峰君・・・」

「おっと、そうでした。俺って人間ではありませんが、魔に近いんですよ。精霊も結局は魔に属するものですから。個人的な予測ですが、これ以上人間から徐々に外れていくと吸血鬼みたいになるかもしれません。」

丁度日光にも弱いしな。

学園長や翔が話を渋るが、俺の今後の可能性の話を提示して押しつける。

もちろん全員に驚かれ、再び危険視する人も現れる。

この学園には真祖の吸血鬼が封印されているので、吸血鬼関係の話題は皆に食いつかれるのだろう。

「き、君は吸血鬼なのか!?」「本当なのか!?」「ブフオッ！
白峰君!?」「緋音!? 一体何を・・・!?」

「先ほども言っただように俺はまだ人間です。魔になるならとつこの昔になってます。仮定の話ですが、このまま徐々に魔に近づいたら俺は人間であろうとするため、それに抗おうとするでしょう。そうになると、本能的に俺の中の欠損した人間の情報を補おうと思うんです・・・他人から。」

そこまで言っただけで皆の表情が変わる。

驚いたり、理解したり、危険な者と判断し、疑問を浮かべたりと色々な反応が返ってくる。

「俺は普通にただの一般人として生きていたのですが、今日を機にできることは手伝います。警備に人手が足りない、傷ついた人を癒してほしい、何かに協力してほしいといった様々なことを納得できる理由があれば、俺にできる範囲で手伝います。だから、その代わりに皆さんにお願いします。俺が人を見境なく襲うような本当の化け物になったら躊躇わず殺してくれませんか?」

その言葉に場が沈黙する。

とうとう我慢できなくなった翔が俺に掴みかかってくるが、無視して話を進める。

「この契約は俺にとっての鎖ですよ。俺が安易に力を求めようとないたためのね。戦力が手に入るし、適度に監視できてそちらに丁度いいでしょう?」

さっきの話を聞いた翔が俺を殴って言い聞かせることができずに齒を食いしばる。

「ただ、俺も生きて人生を楽しみたいので、納得できないことには抗いますよ?」

掴みかかったままの翔の手を解いて握る。

「俺の扱いをどうするかそちらで話し合ってください。できれば、先程いったようにしてくれればうれしいです。それじゃ、明日の放課後にでもまた来ますので、今日はこれで失礼します。」

突然の俺の退出に制止の声がかかるが無視して帰る。

翔も慌てるが、ちゃんとしてきてくれるし、手をしっかり引いて離さないようにする。

俺ももういっぱいいいんだよ・・・

あゝ・・・癒しが欲しい。

第十八話（後書き）

ありがとうございました。

第十九話

学園長室から離れ、今はもう女子中の外だ。

俺たちを追おうとした人は学園長に呼び止められ、今は俺をどうするかで議論が開始しているだろう。

「くっ……あー、疲れた。」

「……………」

「翔。」

「…………馬鹿……………」

「ははは……………」

「この馬鹿野郎が！ 何で俺にも黙ってたんだ！！」

「…………心友じゃねえのかよ……………」

「…………ああ、本当にこいつは俺にはもったいない奴だよ。」

お前の存在があったから俺は間違わなかったんだろうな…………

「・・・悪い。本当はずっと誰にも話さず、いつもみたいに騒いで楽しくしたかったんだ。こんな話聞いたらお前でも遠慮したりするかとk・・・」

「・・・・・・・・」「ゴンッ！」

「・・・・・・・・！？・・・・翔・・・・舌嚙んだぞ・・・・・・・・」

翔が無言で頭を殴ってきた。ついでに舌も嚙んでしまう。

この野郎、地味に痛いんだぞ・・・

「俺を見くびるな。もはやお前が女神や魔王になっただとしても驚かんわ！」

「何で女神と魔王！？　というか、酷いな！？　お前は俺をどんな奴だと認識してんだ？」

「変な男の娘。」

「それは・・・しょうがない。俺の美貌は精霊の加護つきだぜ？」

「そこで自慢かよ！　もっと拒否しろよ！」

「・・・そんなのとっくの昔に諦めてる。」

「・・・悪い。」

少し落ち込んだが、俺たちは目を合わせ笑い出す。

ああ、これでいい。

面倒なことになったが、今はこうして笑っていよう。

・・・まだ入学式から数日しかたってないんだぜ？

濃いんだよ！ 一気に平穩が遠のいたわ！

後回しのつけか！？

「何も食べてないから腹が減ったな。早くどこかで飯食おうぜ？」

「俺、警備の時間なんだが・・・」

「いいじゃん。危険人物の監視ってことで。」

「自分で言うな！・・・もついい、師匠も学園長室だしな。何かあれば連絡くるだろ。」

「そうそう・・・その誰かさんも一緒に行かないか？」

歩きながら談笑していたが、ずっと俺たちを見ていた誰かがそろそろうつうつしいので声をかける。

建物の影から黒髪をサイドポニーにした、やけに長い刀をもった女

の子がでてきた。

気付かれたことに警戒しているようだ。その目つきは鋭い。

あれ？ この感じはどこかで・・・？

「つ、辻斬か！？ まさか現代で遭遇するとは！」

ボケてみたら女の子がズッコケた。

隣の翔は「確かに・・・」と納得している。

「ち、違います！ 私はこの春から麻帆良にきた木乃香お嬢様の護衛です！ 怪しい者ではありません。」

「・・・ああ、葛葉先生に師事することになったっていう関西から来た奴だよな？」

慌てて立ち上がって自己弁護する自称護衛の辻斬ちゃん。

翔は知っていたようで確認を取る。

どうやら裏の警備に関わっているようだ。

「関西って麻帆良からしたら敵なんじゃなかったか？」

「いや、どうやら学園長のお孫さんの護衛のために来たんだと。」

何やら政治的な理由で麻帆良にいるお孫さんを守るため中学から編入してきたらしい。

「お嬢様を守るためなら、相手が関西呪術協会の者であろうと斬ると豪語したそうだ。」

落ち着いてきた辻斬ちゃんがその紹介の後を引き継ぐ。

何でピリピリしてるのかな？

「その通りです。私はお嬢様を守るためにここにいます。そして、お嬢様に近づく怪しい人物を護衛の私が警戒するのは当然でしょう？」

「誰が不審人物だって？ 鏡見てから言いなさい。」

「話が進まんからからかうな。」

「だってこの辻斬ちゃん、自分のことを柵に上げてんだぜ？ それに、学園長室の話も盗み聞きしてたっばいし。」

「な、何故それを・・・！？」

「・・・うん。不審人物でいいな、この辻斬。」

俺の言ったことに戸惑い、戦闘態勢に移る辻斬ちゃん。

それを見て翔も呆れて認めた。

で？ 何で俺が怪しいんだ？ お嬢様とやらも知らんのだが？

「貴様は以前、ここでお嬢様と神楽坂さんに近づいていただろうが！？ 学園長室の話も聞いていたが、お前みたいな化け物がお嬢様に近づいた理由は何だ！？」

化け物という言葉に翔が反応するが、俺が押さえつける。

この辻斬ちゃん面倒臭い。

素敵自分ワールド展開中か？

「俺は白峰緋音っていうまだ人間のー（逸）般人なんだが？ それに辻斬「桜咲刹那だ！」・・・せつちゃんの言うお嬢様に心当たりがないんだけど？」

「き、貴様——！！ その名で私を呼んでいいのはお嬢様だけだ！！」

何か琴線に触れてしまったみたいで、刀を抜いて切りかかってきた。

怒りにまかせた上から下への後先考えない一撃だ。

俺真っ二つになるんだが・・・躊躇いなしかい。

反応できない俺を余所に状況は移る。

翔が咄嗟に風を纏って前にでた。

翔の切り札（契約）だ。俺を通して精霊を従えることを認められた翔は精霊を宿し、纏い、力にできる。

要は「お前のことは認めた。いつでも力を貸してやるから家族（俺）を守れ。」的なことを精霊と契約している。

翔は振り上げられた刀の柄頭を思いっきり下から上へと蹴り飛ばし、そのまま踵を刹那の頭に落とす。

刹那はともに食らい、地面に叩きつけられる。刀は近くの植え込みに突き刺さる。

地に伏せた刹那は意識があるものの何が起こったのかわからないようである。

翔は華麗に着地し、俺の隣、やや前に控えた。その顔はどこかすつきりしている。

「!? ……かつ……は………」

「ありがとな。でも、やりすぎじゃないか？」

「助けてもらって言うことがそれか？」

「女の子には優しくしろってね。」

「いつもの紳士（笑）か？」

「そう。（笑）が重要だ。」

そんな適当な言葉のやり取りをしつつ、俺は刹那に近づきながら怒っている精霊に呼びかけ、宥めながら癒してもらおうようお願いする。

この子の傷が回復するように、心が落ち着くように。

話を聞くために身体を起こさせながら、もう片方の手でダメージを受けた場所を手当する。

「（・・・緋音がお母さんで、桜咲が子供に見える。）」「

そう、そこには転んで泣くむ子供と頭を撫でて慰める母親がいた。

頭部への痛みと混乱と温かさで緊張が解け、泣ぐんでしまう刹那が俺を見上げてくると、先程の鬼気迫る表情とのギャップでかなりかわいく見えたため、思わず微笑んでしまう。

全くこいつは、まるで迷子になった子供じゃないか。

更に微笑ましくなると、しばらくボーツと焦点が合っていない様子だった刹那が俺と目を合わせ、顔が真っ赤になって壊れだす。

「なななななにを・・・！？」

「落ち着け、刹那。」

「せつ・・・！？」

「ごめんな、俺が悪かったよ。翔に蹴られた所は大丈夫か？」

「はい！ はい！ 大丈夫です！」

「うし、痛い痛い飛んでけ・・・ってな。」

最後におまじない（俺がすると馬鹿にできない）をして治療を終える。

手を放すと「あ・・・」と刹那が言葉を漏らすが、すぐ俯いてしまった。頭から湯気がでそうだ。

「（こいつ、そこは変わらないのかよ・・・）また新しいのが・・・」

「

「何が新しいって？ それより翔、この子かわいいな。抱きついて持ち帰りたくなるよな。」

「殺されかけたくせによくそんなこと言えるな？」

「助けてくれただろ、心友。」

「助けるさ、心友。」

いつもの言葉のやり取りを交わしている間、刹那は「私・・・かわいい・・・きゆう・・・」といって処理落ちしていた。

刹那を起こした俺たちは近くにあったファミレスに入り、食事にする。

途中で、今の俺にサングラスが無いことに気付いたため、翔にコンビニにある適当なのを買ってきてもらった。

雑誌コーナーの辺りに、昔見た古い女子中の制服を着た女の子を見かけたが、今日は無視する。

刹那も無理やり連れて行き、そこでさっきの話を続をした。

「（マナ・・・すまん。）」

「そのフライ盛りセットは俺のです。」

「ハンバーグセットはこっちに下さい。刹那は本当にいらないのか？」

「ええ、すでに済ませていますので・・・」

話によると、例のポワポワした大和撫子が学園長のお孫さんで刹那の幼馴染らしい。

政治的にも素質的にも容姿にも優れている彼女はあらゆる意味で狙われるらしく、刹那はこちらに来てから陰で護衛を始めたようだ。

何故陰からかというと、過去に川で溺れさせてしまったことを境に疎遠になってゆき、今さらどのような顔をして会えば分らないらしい。

そして、入学早々怪しい男子（？）生徒と騒ぎになっていたのに気付いたが、彼女が近くにいたために手が出せず、それから俺のことを要注意人物としてマークしていたそうだ。

今日の放課後の攻撃的な視線も刹那が警戒していたからだっただけだ。

さっきの会ったのも、警備中にいきなり女子中の方角で何かが起こったから、相方の傭兵にその場を頼んで駆けつけたかららしい。

そして、持ち場に戻る途中の他の関係者から話を聞き、学園長室に

行っただが入れる雰囲気ではなく、仕方なく立ち聞きして、俺たちが退室したのに合わせて隠れ、警戒していたそうだ。

「（モグモグ・・・）俺ってそんなに怪しい？」

「そりゃあ、かなり目立つよな？（サクッ）」

「いえ、あの、はい・・・すみません・・・」

「（モグモグ・・・）清楚なアルビノ美少女かと思えば、変な女装野郎だったと・・・？」

「・・・はい。」

「（モグモグ・・・）だから、自分で言うなよ。」

「（ゴクンッ）いや、もう俺のネタだろ？ 刹那も気にしないでいいぞ。」

「・・・あの！」

話が脱線していたが、刹那が何か覚悟を決めたようで、顔を上げて俺に向き合う。

「どうしてあなたは他の人と違うことを隠そうとしないんですか？」

「いや、結構隠し事しているが？ 学園長室で結構ばらしたけど・・・」

・
」

「いえ、それもそうですが、その髪とか目とか・・・」

「女みtain容姿とか？」

「はい・・・だって、それが原因でいじめられたり・・・」

「ああ、いじめられたな。」

「それなら何故・・・！？」

落ち着いて刹那を見れば何となく分かる。

刹那は、人だが魔でもあるようだ。おそらく俺が刹那に類似するところがあるんだろうな。

魔眼を使えばはっきりわかるだろうが、そこまでする必要はないだろう。

プライバシーの侵害とか言われたら嫌だしな。

俺の答えで満足してくれればいいが・・・何気に責任重大？

「・・・刹那、俺は俺にしかねないんだ。この白い髪も、赤い目も、女みtain容姿も、人間から外れかけているということも変えようがない現実なんだ。」

腕を組み、真剣に考えて、何とか刹那の質問に答えようとする。

その言葉に思うところがあるのか、刹那が辛そうな表情になる。

「・・・いや、やっぱり今の無し。というか、そんなの難しく考えたことない。（パクッ）」

「・・・は？」

俺の言葉に刹那が呆ける。

何を言っているのかわからない、と目が物語っている。

「（モグモグ・・・）俺は皆と違うこの容姿を受け入れてたんだよ。だから、それを馬鹿にされても何当たり前のこと言ってるんだって思っていたしな。俺が俺のままでいたら何かおかしいか？って。」

「（モグモグ・・・）そうだな。桜咲、こいつは昔から変な奴だったから常人と考え方が違うぞ？」

「（ゴクンッ）失礼な奴だな、心友。」

「（ゴクンッ）お前は変な奴だ、心友。」

「あ、あの・・・？」

刹那が話についていけずに狼狽えている。

・・・うん、やっぱ美少女は目の保養になるな。

「俺はアルビノ体質で、小さい頃は屋内にいてばかりだったからなあ・・・付き合いが狭かったっていうのもあったな。」

「お前の両親はお前を女の子みたいに溺愛してたな。それに俺と早いうちに友達になったしな。」

「そうそう、翔みたいな心友がいたからいじめられても困らんかったな。だから俺は俺のままいられた。」

「こいつ心友の扱いが酷いんだぜ？それに、初めはかわいい女の子と思ってたら男だったしな。」

「騙された方が悪い、マセガキ。」

「黙れ、男の娘。」

「・・・白峰さんは恵まれていたんですね。」

む、いかん。

刹那が暗黒面に落ちているな。

俺の話参考にさせるところかとどめになってしまったか？

「こら、せつちゃん。お前には近衛がいたんだろうが。」

「せつ・・・せつちゃんは止めてください！それに、お嬢様とは・・・」

「あのな？桜咲が近衛をどれだけ大切にしてるかは話を聞いたただけでわかる。近衛も桜咲と仲良くしてくれたんだろうが。今でも仲良くしたいと思ってるはずだぞ？」

「確かに、お嬢様は私を気にかけてくれます。ですが、私は・・・」

「純粋な人間じゃない、か？」

その言葉で刹那は驚き、怒り、戸惑い、頭が真っ白になったようだ。

「刹那、俺を見る。」

席を立つて向かい側にいる刹那の顔を固定し、俺と目を合わせさせる。

何故かキヤーキヤー聞こえるが無視。翔の張った認識阻害結界は万全のはずだ。

「刹那、目の前にいるのは何だ。人間か？違うだろ？どんなに言い繕っても俺は何物でもない。人間でもなく、魔でもない、精霊

でもない、化け物でもない、人型の中途半端な不安定存在だ。お前は俺を見てどう思う？ どうだ、気持ち悪いか？」

「あ……わ、私は……」

「まあ、そんなことはどうでもいい。」

「……え？」

「（ブツ……）いいのかよ!？」

食べ物を吹き出しかけた翔のツツコミを無視して、刹那の顔から手を放す。

ポカーンとした刹那は浮いていた体を席に座り、呆けたままだ。

席に座り、翔を指さす。

「翔を見る。こんな変な奴だと知らせた後でも心友のままだし、躊躇いなく付き合ってくれる人間だっているんだ。つまり、仲良くなつちまえば種族がどうのこうのは関係ないんだよ。」

「どんな暴論だ……というか、お前勢いで言ってるだろ？」

「刹那、まずは自分を受け入れる。他人が何を言おうが関係ない、自分は両親に愛されて生まれてきたんだということを思い出せ。お前は自分の意思で好きに生きていいんだ。」

「無視か？」

「自分を……私は……」

うむ、なんとか誤魔化せたかな？

もっと畳み掛けるか！？ ↑暴走中

もはや悩みなど吹き飛ばしてくれよう！！ ↑さらに加速

「刹那、お前が自分に自信が持てないなら、俺が言ってやる。お前はとってもかわいい女の子だ。もっと胸を張れ。」

「かわ……！？」

俺の言葉に刹那が赤くなって、あたふたする。

「お前、テンパってないか？」

「だって翔、刹那を見るよ。こんなかわいい生物、人間とか人外とか関係ないだろ？」

「いや、かわいいけど……今話してたのは、桜咲が人じゃないから近衛と仲良くなれないってことだろ？」

「そんなのはせっちゃんがちよっと頑張って挨拶でもすれば一発だ

ぜ。だって、こんなに美少女なんだからな！」

「かわいい？ 私が、美少女？ あわわ、わ、私は、私は……」

「……無理。もう、俺の手に負えん。（パクッ）」

……さて、お互い頭が冷えまして、食事に帰りながら話の続きをする。

「（モグモグ……）刹那、ごめんな。でも本心だから。」

「い、いえ、お気持ちは嬉しいかったです、はい。」

「（ゴク……ゴク……）それで、自称何物でもない奴の言葉は参考になったか？」

「（パクッ）いや、我ながら的を射た答えだと思うが？」

「お前がやっているのは、自軍のゴールに直球を叩きこんでうれしがっているのと同じだ。」

「（くすつ……）ふふ、ありがとうございます。私が悩んでいたのが馬鹿らしくなりました。」

堅い雰囲気が解けてきた刹那が、俺たちのやり取りに微笑む。

「それはよかったな。桜咲はその顔を近衛の前でも見せてあげればすぐ仲良くなれるよ。」

「えっ・・・いや、それは・・・」

「刹那、大丈夫だ。全部は明かせなくても、お前が歩み寄れば、きっと近衛と仲良くなれる。」

「・・・はい！」

俺が微笑みかけ、心配するなと応援する。刹那も顔を赤くしながらもそれに答えた。

うん、きつとうまくいくさ。

彼女たちに明るい未来がありますように。

俺の明日は真っ暗だな！

ちなみに、ファミレス内では目立つ（三人とも容姿がいい、二人は服がボロボロ）俺たちの行動は注目を集めており、二股のハーレム男のグループかと思いきや、男装の麗人（または男の娘）が男女をはべらしているように見えたとか・・・

第十九話（後書き）

ありがとうございました。

次はいつもの（ホワホワした感じの）主人公バージョンです。
今回の（男っぱい）主人公はまたその内です。下手したら隔日で。

第二十話（前書き）

今回の緋音は泣き虫です。

ちよつと教室で会話させて学園長室に向かわせるはずなのに・

・

思っていたものと違う話が書きあがりましたがどうでしょう？

第二十話

・・・んー？

ああ、朝ですか？

ふあああ・・・昨日は今までで一番濃い日でしたね。

癒しを求めた筈なのに、それ以上に疲れさせられた厄日（または女難の日）でしたからね。

・・・うん。ちゃんと自分のベッドに寝ていますし、何か荒らされた形跡もないので無事だったのでしょね・・・

この魔窟（男子中の寮）は私にとって休む場所ではありませんからね！

警報装置も罠（トラバサミや地雷）も無いこの部屋はサバンナで野宿するのに等しいです！

早く、奴ら（ガチホモ＆私を敵とみなした女性的男子^{オカマ}）に有効な手立てを講じないと、私は・・・私は・・・！？

・・・ま、そこら辺は精霊さんにもお願いしており、不審人物には意識誘導や不慮の事故などを起こしてもらって予定なので大丈夫でしょう。

魔法の秘匿？ 日常で力を使わない筈では？

そんなモノ、私の身を守るのに何の役に立つんですか！？

お、落ち着け・・・落ち着くんですよ、私。

朝からこんなハイテンションでどうするんですか？ お腹が減るだけでしょう？

ならば、することは一つです。

朝ごはんを作りましょう！

・・・あ、日傘どうしましょ？

昨日の夜は晴れていたのに、今日は偶々小雨が降っていたので、雨傘を差して登校しました。

ついでに、久々にサングラスを外しながら登校しています。

予備のサングラスなので、どうも違和感があるんですよ。

今日は、私にとっていい天気ですね！

朝ごはんを作って、しょーくんを起こしたんですが（親に送られたフリフリエプロン付で）、頭抱えてブツブツ（「何で・・・フリフリ・・・戻・・・昨日の・・・うん、緋音だもんな。」）言っていました、しっかり食べて（半分やけ食い）元気になりました

た（忘れることにした）。

ああ、雨もいいですね〜。

「そうか？ 俺は濡れるから嫌いだな。」

ふふ、そうですね。私も大雨は困ります。

でも、空から落ちる水が奏でるこの音が好きなんですよ。

静かに、淡々と、私も自然の中に解けて、世界に流れていきそうで・
・

それに、時と場所によって聞こえてくる音が違って楽しくないですか？

「・・・そのまま、雨と一緒に消えんなよ。」

ああ、昨日のことを思い返しちゃいましたか。

別に本当にそうなりたいと思ってはいませんよ？

ただ、ここが現実だと理解していても、どうしても心の隅っこで・
・

・・・消えませんよ。

も、しよーくんは心配性ですね？

信じてくれないんですか、心友？

「（む・・・偶には意趣返ししてやる。）信じるさ、変。」

・・・あれ？ ↑心友って言うてくれるのを期待してた

あ、あの・・・あの、しよーくん？

「何だ、変？」

あれ？ あの、私たち・・・心友ですよ？

「ああ、変」

しよーくんがグレた!？

『変』の一字だけって、人としてすら認められていない!？ いや、確かにそうですけど・・・

あれ？ 目に、雨が・・・ふふ・・・傘、差してるのに・・・

何で・・・どうして、そんなこと言っんですか・・・

「（中々面白いな・・・）どうした？ 何かおかしいか？ いつも通りだろ？」

だって・・・わ、私のこと、変ってえ・・・

「（あれ？ いつもに比べてめちやくちや精神弱い？）・・・緋音、ごめんな。でも本心だから。」

・・・うつ、わ～ん！！

しょーくんの馬鹿ー！ パクリ野郎ー！！ B L 疑惑ー！！！！

「ば、緋音！？ 通学路でそんな（シャレになっていない）出鱈目言うなー！！ 泣くなー！！」

あ、朝倉くーん！ ↑クラスメイト。写真撮影が趣味。

しょーくんを罵っていると、偶々通りがかったクラスメイトを発見したので水たまりを踏みながら駆け寄ります。

傘も振り乱してしまい、全身が少し濡れてしまいました。

「ちよっ・・・！？」

「ん？ おう、白峰じゃん。そんなに慌ててどうしたんだ？」

おはようございます！

実は・・・しょーくんが、しょーくんが私のこと、変って言うんです！

わ、私って・・・変、ですか？

その時の私は、本物の雨に濡れた弱弱しいアルビノ美少女、いや、見えない羽を濡らした天使に見えたようです。その上、涙で潤んだ緋い目が妙な色気を感じさせ、怯えた様子が嗜虐心を刺激し、サングラスが無い分可愛らしさが溢れ、全体的にキラキラしていたそうです。

朝倉くんはカメラマンとしてのプライド（『絶対にシャッターチャンス逃すな！』）が無ければ、越えちゃいけない一線を越えていたかもしれないと真剣に語ります。

「緋音、お前なあ・・・？」

うう・・・朝倉、くん？

クラッ・・・「（た、耐えろ、耐えるんだ俺！ 白峰は男！ 男、の娘だ！？ カ、カメラ！ 写真！ 俺は・・・）俺はカメラマンだー！！」

しょーくんを無視して朝倉くんの答えを待っていると、一瞬何かと必死に戦っていた朝倉君が何とか持ちこたえ、私に向き直ります。

その片手にはいつの間にかカメラ（麻帆良の最新技術で製作された

らしい試作品。暗闇でもフラッシュ要らず）を持っており、もう片手でいつのまにやら鼻に血染めのティッシュを詰めていました。

そして、至近距離から、距離をおいてから、様々な角度から、時にちよつとポーズを変更させられてテキパキ撮り終え、いつの間にか携帯でどこかにメールを送っていました。

特別早かったわけではありませんが、その手際の良さと突然の行動、変なカリスマに思わず従ってしまい、しょーくんも呆けてしまったため、本人が一仕事（ほんの一分くらいの出来事）を終えるまで反応できませんでした。

「ふう・・・あ、白峰、お前は変じゃないよ？　お前はいい奴（被写体）だ。」

は、はあ・・・ありがとうございます？

・・・あれ？

「（ハッ！）朝倉！　お前、誰にメールした！？　それと、何でしや・・・」

いつの間にか、私たちを見ていた登校中の生徒の内の何人かがしょーくんに近づき、しっかりと離さないように肩を掴んでいました。

クラスメイトもいれば、寮の先輩もいます。優秀なしょーくんの背後を容易くとは・・・って、あれ？

さっきまで皆さん、近くにいましたっけ？ 私（人間視線探知機）ですら気づけなかったですと！？

「な・・・！？」

「宮部君、いけないなあ・・・」「みいゝやあゝべえゝ・・・」「全く、心友を泣かせるとは・・・」

「白峰ゝ、俺たちは教室に行こうぜ？」

「そうそう、宮部は皆と話があるんだってさ。」

「はは、朝から面白いことになってるね。」

「朝倉、さっきの写真いくら？」

「うゝん、まだちゃんと写真の仕上がりを見ていないからなあ・・・一枚400円で、どお？」

「」「」「全種類買った！！」「」「」

最後の方、聞こえてますからね？

そついうのは陰でするものじゃありませんか？

そのまま、三つの集団に分かれかけましたが、行く前に二つは言うておきたいことがあります。

あ、あの〜！ S H Rに遅れると悪いんで、しょーくんとのお話は
ほどほどにしてあげて下さいね〜？

「「「「任せろー！」「「「「ちよつ、緋音・・・！？」

後、朝倉君は貸しにしときますからー！

「お、話が分かるな！ 皆、さっきの白峰緋音の写真は一枚300
円だー！」

「「「「ひゃつはー！ー！」「「「「

・・・あはは、凄いことになっちゃいました。

朝から雨の中、皆元気ですね〜。

「・・・白峰つて、たぶん自覚してるよな？」「したたかだな・・・
さっきのも演技か？」「意外と黒いね。」

あゝ・・・昔からこんな恰好なので、色々諦めてるだけですよ？
いや、流してるだけですかね？

「あゝ、女みたいだし、目立つもんな？」「並の美少女より綺麗だ
しな。」「あはは、色々大変だったんだね？」

そうなんです。男らしくしようとするより、女らしくしたほうが全
然違和感ないんですよね。もう、この私に慣れちゃいました。

それに、拒絶されるよりはこうして騒いでくれるほうがうれしいですから……

「」「白峰（君）…………」「」

ああ、どうも今日はいつもより弱いようですね。

昨日のせいで、まだ不安定になっているんでしょうか？

そう……きつと、何よりも、心が……

あ……また、目に…………雨…………が…………

「…………ほら、早く教室いこうぜ？」

「それより、先に保健室でタオル借りれば？」

「そうだね。暖かくなってきたとはいえ、そのままだと風邪ひくよ。」

「

……中学生になるのも、悪いことばかりでは無かったみたいですね？

授業はいつものように、騒動↓即鎮圧で進められました。

今日の体育の授業は合同で行われ、雨のため屋内でバスケットをすることになりました。私はいつものように見学していましたが、互いに超攻撃的な姿勢の白熱した試合が繰り広げられました。（緋音の応援で張り切る仲間チームVS嫉妬する敵チーム）

ちなみに、SHRにギリギリ間に合ったしょーくんは「理不尽だった・・・」と落ち込んでいましたが、お昼には正気に戻っていました。

放課後になると、今後使う日傘を買いに行きたかったのですが、昨日の話を続けないといけなかったので、再び女子中に向かいます。今回はしょーくんも私の扱いが気になるのか、一緒に来てくれるそうです。

「白峰、宮部、一緒に遊ばないか？」

「いや、皆で行かね？ 緊急カラオケ大会開催しようぜ！」

「本当に急だな！？ つつーか、金ねえよ！」

すみません。今日も学園長室に行かなきゃならないので・・・

それに、日傘も買いに行かないといけないので今日はお付き合いできません。

「俺も緋音と一緒に、学園長に用事があるんで無理だ。悪いな。」

そう伝えると、最近結束が固まってきたクラスメイトのほとんど全員が（部活などに出掛けようとした人も足を止めた。）私たちの方へ集まってきました。

「え？ また呼ばれたのか？」「大丈夫なのか？」

「今度こそ俺もついていくぞ！」

「いや、俺が！」

「馬鹿、呼ばれてない奴が行くと迷惑だろ？ 俺が行く。」

「「この迷惑野郎！！」」

「今回、女装は？」

「あ、でも宮部も行くんだよね？」「白峰、宮部。いい被写体がないか調べてきてくれ！」

「朝倉、女子中にいとこいるんじゃないかなかったか？」

おおぅ・・・

これは何時ぞやの反応に似ていますね？ いや、人気者（動物園のパンダ）は辛いです。

とりあえず、収拾を・・・

「あはは、その呼び出しって、白峰君が女子中に通わないかの誘いだったり・・・」

ピタッ！ と全てが止まりました。

声も、足音も、服の擦れる音も、空気の動きも。息も一瞬止まったのではないのでしょうか？

皆の視線は発言者の久保田くんに注がれています。

本人としては冗談で言っただけなのに、予想以上に皆の注目を集めてしまつて慌てました。

「あ、いや、白峰君って女の子みたいだからさ、男の中で生活させるよりそっちが似合ってるかな、って。それに、学園長なら悪ふざけで男女共同のテストケースにしそうでしょ？ ここ最近、男女共学化の話も有ったみたいだし・・・」

戸惑いながらも、皆に聞こえるように自分の考察を述べる久保田く

ん。

その話を聞き終わり、笑っている人もいますが、納得したという感じの人も多いです。」

「あゝ、確かにな……」

「白峰が女子中に……違和感ねえな。」

「あはははは、シャレにならないって!」「うん、ピッタリだな。」

「おいおい、本当の話じゃないだろ?」

「いや、でも学園長が聞いたら本気にしそうだよなあ……」「学園長って悪ふざけが好きらしいし……」

「そうだな。でも、白峰が女子中に移るのは困るぞ。」

「笑えない冗談は止めとけ、白峰に失礼だぞ?」

あははは、いくらなんでもそれは無いですよ?

ほらほら、皆さん落ち着いて下さい。

そんな話はありませんから、ね?

皆にごめんと謝られ、笑ってその話は終わりました。

とりあえず、いつか皆で遊びに行こうぜと言う話が再び盛り上がり、少しくらいならいいかなと考えた私たちもその話し合いに参加しました。

そして、話が大体まとまり、今いない人にも声をかけておくように注意し、話し合いが終わるかと思われた時に、誰かがクラスに入ってきました。

忘れ物でも取りに来たんですかね？

そこに居たのは、私たちが集まっているのに驚いた様子の樋口くん（不思議な事とか面白い事を調べるのが好きらしい）でした。

「あれ、まだ皆居たんだ？　ちょうどよかった。実は白峰が・・・」
はい？　呼びましたか？

「おお、本人もいたのか？　白峰、女子中に通うんだってな？」

・・・は？

私だけでなく、談笑したり、帰ろうとしていた皆もポカーンと呆けてしまいました。

「あれ？　違うのか？　他のクラスの奴らや先生たちが話してたぜ？　一部の奴らは何やら学園長に直談判するために集まる計画も立てているらしい。男子中の最新の話題だ。報道部も号外作ってるし・

・
・
」

・・・え？

もう一度情報収集に出掛けた樋口くんは、三十分も経たない内に、あらゆる手段を惜しみなく使って調べ直して来てくれました。

どうやら、先程の久保田くんと皆さんの話が聞こえた何人かの生徒が他の生徒にネタとして話していたら、それを偶々聞いた生徒（先生）がさらに友達（同僚）と話し、私のファン（？）が同土に呼びかけ、それを偶々・・・という風に繰り返され、歪められていったようです。

私は良くも悪くも目立ちますし、話がシャレになってなかったため、所謂伝言ゲームみたいなのがこの校舎を中心に行われてしまったようです。

それにしても話の広がる速度が異常ですが・・・さすが麻帆良。

途中、仲のいい先輩に話していたり、職員室に行って確認する人がいたり、あちこちに知らせと確認のメールや報告を言って回ったりする人もいたそうです。

ここまでだったら、少し我慢して笑顔で否定していれば、唯のデマだったということが分かり、すぐ飽きられるだけでした・・・

一番の問題は、何故か先生たちが乗り気なことです。

私のクラスで授業を受け持った先生方は納得したり、面白がったり、真剣に考えたりしていたようです。ついでに、話についていけない先生には、誰かの没収された私の写真を見せたりしているそうです。

そして、生徒指導や学年主任の先生方も、私のことを気にかけていたようで、「ちょうどいいかもしれない・・・」「ふむ、学園長にかけあってみますか？」と話し合っていたようです。

さらには、「彼がいると男子中の風紀が大きく乱れる。」「本人の気質も女の子みたいだからすぐ馴染めるでしょうね。」「初めから女子中に進学希望出せば通ったのでは？」「ほとんど女だから共学のテストケースに向かないのでは？」「男子中にいる方が危険でしょうね？」などなど、その場に本人がいないからって遠慮なく話しているようです。

話が終わると、皆さんは壊れた口ボのように顔ごと視線を久保田くんに向けます。

「・・・あ、あはははは・・・」

ジーッ・・・

↑約30人分の視線

「いや、でも、例え話だったし・・・」

ジ——ッ・・・
↑約30人分の変わらない視線

「えっと・・・あの、皆も・・・」

ジ——ッ・・・
↑約30人分の温度の無い視線

「・・・ご、ごめんなさい。」

「「「「久保田（君）の馬鹿——！！！！」」」」

あ、あの・・・すみ、ません・・・泣いても、いいですか・・・

「「「「し、白峰（君）・・・」」」」

「いくら本人が慣れているって言っても、これはキツイよな・・・」

「ああ、特に先生たちの話合いは致命傷レベルだろうな。」

「嘘から出たまこと・・・か。」

「（緋音、悲惨すぎる・・・。それに、やっぱり今日は不安定だな。）」

うつうつ・・・で・・・何で・・・こんな大きな・・・に・・・

・・・先生も・・・何で、乗るの・・・

その時、樋口くんの携帯が鳴り響き、誰かと話をし始めました。

ありがとって言って短い電話を終えた樋口くんは皆を見渡し、注目を集め、両手で顔を覆う私に視線を固定します。

「同士からの連絡だったんだけど・・・白峰。」

・・・うつ・・・何で、そんな話が・・・早く・・・

「白峰、よく聞け。さっきの話が学園長に（電話で）通され、快く受諾されたそうだ。」

あ・・・！！？

メノマエガマッシロニナル・・・

怒り、悲しみ、困惑、嫌悪、拒絶、不信・・・色々な感情が一気に解放されそうになる。

いけない。

感情が高ぶる。制御できない。

特に、二つの感情を抑えきれない。

私に宿る一部の精霊が強い感情に反応する。（ここに居てここに居ない）数多の精霊も引きずられる。

しよーくんが慌てて駆け寄るがもう遅い・・・

ほとんど無意識的に判断し、私を中心に起こしそうになる精霊の暴走を遥か空高くで起こさせる。

もう、私の感情に引つ張られた精霊たちの暴走を止められない。

何より、私を抑えられない！

あ・・・！ う・・・！ うわ————ん！！！！！！

「「「「し、白みりってなんじゃーりゃー！！！！？？」「「「「

ドッパ————ン！！！！

私が大泣きするのに少し遅れて、空から滝のような雨が降り注ぎました。

空にあった雨雲を超えられると思われる大量の水が流れ落ちていきます。

「緋音——！！」「うおおおお——！！」「はあああああ——！！」

「……あ！窓！窓——！！」

「……え？あ……し、閉めろ！浸水するぞ——！！」

何で？何で私が——！！？

「緋音——！！」

しよーくんが私を自分の胸元に押し付ける。

ああ、駄目です。駄目ですよ、それじゃあ……

私はあなたにこの悲しみをぶつけられない。そして、今の私は泣くしかできないんです。

「あゝ、宮部？　今は、ちょっつと酷いんじゃないか？」

「ん？　ああ、大丈夫だ。軽く頭突きを入れたただけだ。（緋音ごめん。さすがに上手いフオローができなかった・・・）」

「で、でも、白峰君・・・起きないよ？」

「あれ？　おかしいな？」

「（ヒソヒソ）おい、白峰かわいそ過ぎるだろ？」

「（ヒソヒソ）ああ、登校拒否になってもおかしくない話になって、泣いてる時に頭突きだもんな。」

「（ヒソヒソ）宮部、マジで鬼だな・・・」「（ヒソヒソ）保健室連れてった方がいいんじゃないか？」

「（ヒソヒソ）なあ？　今の頭突きでさっきのこと忘れてないかな？」

「」「いや、それはそれでマズイ！」「」

本当に軽く一撃を入れたつもりの翔は、床に手を着いている俺を見て疑問を浮かべ、その後ろでは皆が集まって内緒話を始める。

いや、助かったけど・・・何か、もう一度泣きたくなってきた・・・

もう制御を取り戻して、空が晴れるように頼んでいるし・・・もう、

いいよな？

「ん？ 緋音、起きてるじゃんか。（あー、良かった。皆の前で暴走するんだもんな。）」「ペシッ

・
・
・
・
・
・

俯いてまた涙を流していると、俺が起きているのに気付いた翔が頭を軽く叩いてきた。

俺は無言で立ち上がる。

「翔、ちょっとしゃがんでくれ・・・」

「（翔？）緋音、どうs・・・」

ゴンー！！

教室にいい音が響くような頭突きをお見舞いしてあげました。

私だって怒りたくなる時があるんですよ！

勿論、私の方が揺さぶられるほどの痛手を負いましたが、偶には暴力に賛成してもいいでしょう？

「いつ！？ あ、緋音？」

バーカ、バーカ！　しょーくんのアホー！

何が「こんなことで泣くな！」ですか！？

泣かなきゃやってられませんよ！？

「緋音が・・・俺を・・・？」

皆さん、どう思いましたか？

中学生になってマジ泣きしちゃった私が言うのもなんですが、泣いちゃダメでしたか？

尻もちついたまま俯いてブツブツ言ってるしょーくんを無視して、ポカーンとしている皆に聞いてみます。

私に気付くと、皆さん頭を縦に振ってくれました。

「いや、あれは仕方ないだろ？」

「うんうん。」

「俺なら怒って暴れてたぜ？」

「はは、それに比べたらマシだよな？」

「でも、宮部は鬼畜だったよな？」

「ああ、泣いてる奴を叩くなんて最低だぜ？」

「『『『そうだな。』』』」

ビクツとしょーくんが肩を震わせ・・・

こらー！ 皆さん、駄目ですよ？

しょーくんを責めないで下さい。

・・・恐る恐る私を見上げてきました。

「いや、でも・・・」「いくら何でも・・・」

しょーくんが他の子に同じことしたら鬼畜なドS野郎でしょうが、私としょーくんは心友ですからね。

問題なしです。

ああでもない、私は今でも泣いていたでしょうね。

あんまり、皆さんに迷惑をかけるのも心苦しいので丁度よかったです。

そう言い切って、何とか納得してもらいます。

皆、最後の言葉を否定してくれましたが、笑顔のままでいたらそちらも何とか納得してくれました。

しょーくんを見ると、怒られることに怯えている子供みたいな状態でした。

んー・・・しょーくんを怒って殴ることってあんまりありませんでしたっけ？

仕方ないかなと思いつつ、微笑みかけ、今度は私がしょーくんの頭を胸に抱いてやります。

慈愛に満ちた表情で、泣く子供をあやす。

泣かぬよう、落ち着くよう、いい夢が見られるよう・・・

そう、そこには、全てを許す聖母がおりました。

晴れた空からの光が重なり、見る者全てが同じイメージを幻視してしまうこの光景に、周りの皆からは感嘆の声しか漏れないようです。
(約一名は仕事を開始)

「緋音・・・俺は・・・」

もう、いいんですよ？ そんなに気にしないで、ね？

私たちの関係はこんなことで揺らぎませんよ。

信じられませんか、心友？

「・・・信じてるさ、心友。」

よし、いつもの調子に戻ってきましたね。

周りを見れば、皆少し顔を赤くしてただ呆けていますね？（約一名を除く）

しよーくんも落ち着いたため、周りの皆に気付いて驚きます。

「（あゝ、もう・・・）ん？ うおおお！？」

ありゃゝ、皆さんすみません。私たちだけで勝手に盛り上がってしまっただけ・・・

「（ハッ・・・）い、いや気になくていい。」

「お、おう。何も問題はない。」「・・・すげー、聖母って実在するんだ？」

「うん、神聖な光がみえた・・・」「奇跡・・・か?」「ふむ、まさかここまでとは・・・」「(ボソツ)俺も癒されたい・・・」

あははは、皆さん？ 恥ずかしいですから、秘密にして下さいね？

恥ずかしがって床を転がるしょーくんを無視して、皆さんに少し照れながら微笑み、黙ってもらおうようお願いします。

・・・よし！ 同意してくれたので、これでいいですかね・・・

あ！ 朝倉くん、さっきの写真を私にも下さいね？

ん？ おーっと！ すみません、学園長！

第二十話（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1159y/>

それなりに上手くいっていた人生でした。

2011年11月24日02時47分発行